

一宮市・尾西市・木曽川町合併シンポジウム  
(木曽川会場)

平成15年11月1日(土)

一宮市・尾西市・木曽川町合併協議会

## 一宮市・尾西市・木曽川町合併シンポジウム

日 時 平成15年11月1日(土) 午後1時00分

会 場 木曽川町中央公民館 講堂(木曽川町役場2階)

基調講演講師・コーディネータ

稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

パネリスト(4名)

杉本 尚美 一宮市・尾西市・木曽川町合併協議会委員(木曽川町選出)

谷 一夫 同 会長(一宮市長)

丹羽 厚詞 同 副会長(尾西市長)

山口 昭雄 同 副会長(木曽川町長)

日 程

1. 開演
2. あいさつ
3. 基調講演 「地域の未来と市町村合併」
4. パネルディスカッション ~みんなで考えよう このまちの未来~
5. 質疑応答
6. 閉演

司会

皆様、お待たせいたしました。ただいまより「一宮市・尾西市・木曽川町合併シンポジウム」を開演いたします。

本日は、お忙しい中、「一宮市・尾西市・木曽川町合併シンポジウム」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日のシンポジウムは、初めに基調講演といたしまして、四日市大学総合政策学部助教授、稲沢克祐先生より、「地域の未来と市町村合併」と題しましてお話をいただきます。その後、休憩を挟みまして、この地域、一宮市、尾西市、木曽川町の合併につきまして「みんなで考えよう このまちの未来」のテーマのもとパネルディスカッションを行います。会場の皆様よりご意見、ご質問をお受けする時間をとってございますので、後ほどよろしく願いいたします。

そして、申し遅れましたが、私、本日の司会進行を務めさせていただきます江崎あずみと申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、まず主催者を代表いたしまして、一宮市・尾西市・木曽川町合併協議会会長 谷一夫一宮市長よりごあいさつ申し上げます。

谷 一夫合併協議会会長

皆さんこんにちは。今日は秋晴れの大変いい天気になりましたけれども、貴重な時間を割いてこのシンポジウムにご来場いただきましてありがとうございました。私は、合併協議会の会長を仰せつかっております一宮市長の谷でございます。

一宮市の皆さんとは、5年足らずの市長生活の中で、もう何千回もお話をさせていただいておりますが、木曽川町の皆様の前でお話をするのは初めてでございます。そういう意味で大変緊張をしております。今日も出がけにネクタイを何本も変えたり、背広を着がえてみたり、いろいろそわそわしておりましたら、家内が「今日はお父さんどうしたの、何かいつもと全然違うね」と、ずばっと見破られてしまいました。本当に初めて彼女の家に招かれた彼氏のような気がしております。珍しく大変緊張しております。

さて、私どもの合併協議であります。8月8日に第1回の協議会を開催いたしました。その後、小委員会も含めて、かなりの回数の議論を重ねてきております。これからも続く準備の中で、なぜ合併かというお話は十分に出てくるかというふうに思っておりますが、合併について大変慎重なお立場の方もおいでになれば、合併について積極的に考えていらっしゃる方も当然おいでになるわけでございます。

私どもの協議について、合併ありきではないかと、そういったご批判もしばしば頂戴するわけですが、私ども、決して合併ありきということで協議をしているわけではございません。しかし、今のような情勢の中で、やはりこれからの長い将来を見渡すと、今のこの時点で合併について真剣に考える必要があるのではないかと、そういうふうに私や尾西の市長さんや木曽川町長さん始め多くの方のお気持ちが一致をいたしまして、この協

議会を始めたわけでございます。

合併をするとすれば、どんな形になるのかと、こういった視点で今協議を進めているわけでございまして、来年になりますと、もう少し具体的に新しいまちの姿が見えてまいります。皆様方にとって大変ご心配な、さまざまなサービスの水準や負担の問題も、ある程度お示ししたいと、こういうふうと考えておりまして、その時点で皆様方にご判断をいただきたいと、こういうふうと考えております。今日は、まだそこまで決まっておりますので、今年のそういったネタについてはちょっとお話しすることはできないかというふうに思いますが、今の時点でお話できることを、できるだけ率直に正直にお話をしたいと、こういうふうに思っております。

少しかたいお話もあろうかと思いますが、どうかひとつ最後までご清聴を賜りまして、今後の合併の行方に是非強い関心をお持ちいただくようお願いをしまして、私のごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございました。

(拍手)

司会

続きまして、会場市町を代表いたしまして、山口昭雄木曾川町長よりごあいさつ申し上げます。

山口 昭雄木曾川町長

皆さんこんにちは。今日は、ようこそこの木曾川会場においでいただき、誠にありがとうございます。

さて、私は今この地域の合併協議が大きな山を迎えていると思っています。この合併が成功するかどうか、つまり、みんなが合併してよかったと思えるような結果が得られるかどうか、そういう大きな山であります。間もなく、今、一宮市長さんがおっしゃったように、具体的に合併のメリット、デメリットが皆さん方に示されます。そうしますと、皆様方の雰囲気ぐっと盛り上がってくると思います。それを受けて、合併協議会がどのように議論を進め、そしてどんな判断が示されるか、まさに合併の成否を分ける天王山であるというふうに思っています。

今日は、その大きな山を超えるための最終ベースキャンプのようなものと私は位置づけをしております。その重要な合併シンポジウムの初日が、この木曾川町で開催されることを大変ありがたく思っています。これを企画していただいた合併協議会事務局の皆さん、そして、この木曾川町にまでおいでいただいた一宮市、尾西市の両市長さん、そしてコーディネータ、講師の先生、さらに、何よりも今日ご出席いただいた皆様方に心から感謝を申し上げて、開催地のあいさつにいたします。ありがとうございました。(拍手)

司会

それでは、これより基調講演に移らせていただきます。

本日、講師としてお招きいたしました稲沢克祐先生は、昭和34年、群馬県でお生まれになり、昭和57年東北大学を卒業後、同大学院教育学研究科博士課程に進まれ、昭和61年に群馬県庁へ入庁されました。その間、財団法人自治体国際化協会ロンドン事務所所長補佐

を歴任され、平成13年、四日市大学総合政策学部助教授に就任され、現在に至っております。ご専門は地方財政論などで、現在、京都府参与を初め、名古屋市行政評価委員会副委員長など幅広くご活躍でございます。

本日は「地域の未来と市町村合併」と題して基調講演を行っていただきます。先生のご専門の財政的なご見識も踏まえながら、この地域の合併について有益なお話をお聞かせいただけるものと存じます。

それでは、稲沢克祐先生のご登場でございます。どうぞ皆様、盛大な拍手でお迎えくださいませ。（拍手）

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

皆さんこんにちは。ただいまご紹介に預かりました稲沢と申します。

あいさつ、とにかく元気よく私は今日しようと思って、第一声を発したわけですけども、なぜかという、これからお話しする話、財政ということが出てまいりました。財政の話です。これは、今日の天気のように晴々とした話がなかなかできづらくて、今までもこのような機会をいただいて、財政の話を中心、市町村合併の話、財政の話を始めますと、私なりに一所懸命話したなど、今日はいい講演をしたなどと思って、ぐっと顔を上げると、会場の方々が「ウン」と、こうなだれているようなことが時たまありました。それで、私なりにそういったこと、この財政の話を中心にするわけでも今日はありませんけども、とにかく、今これから話すお話というのは、ひとつそのような像を、イメージを描いております。

今までこの50年間、日本という国がひとつの目標に向かって走り続けてきました。そして、今皆さんもお感じのとおり、その日本の今までの仕組み、50年間支えてきた仕組みが、少しずつ、少しずつきしみ始めていると。それが、一つの経済、財政の姿となって表れてきているという点、それが現在の日本を覆っている危機感だろうと思うのです。その危機感をそのままにしておきながら、この50年間の未来を果たして乗り切っていけるのだろうか。このようなことを考えますと、今ここで、何か50年を見据えた、過去50年間を考え、そして、将来50年間を見据えた何らかの手を打つべきときに来ているのではなからうかと。

その一つの一手が市町村合併なのではなからうかという点から、市町村合併をすることの良さ、そして市町村合併をすることに、皆さんがもし抱かれるとすれば、その不安、懸念、そういったものを一つ一つ考えながら、私が申し上げたいのは、今これから50年という未来、まさに私にも高校生の子供がおりますけれども、今後50年間生きていく子供が、そして恐らくは孫が生きていくこの日本、そしてこの地域ということを考えてときに、市町村合併という、その一つの考え、改革を今していかなければ、恐らく得られないメリット、そして恐らくデメリット、不安、懸念というのは、今皆さんと一緒に考えていけば乗り切っていけるであろう不安、懸念であるということ、そのようなことを皆さんと一緒に考えながらお話をさせていただければと考えております。

そこで、早速なんですけれども、この50年間、もう皆さんお気づきのとおり、いろんなことが上がってまいりました。まず、私も今身につけておりますけれども、携帯電話の普及

が、10年前に果たしてこのような世の中になるとはだれが予測していたでしょうか。非常にこれは便利なものですが、いつ、いかなるところにいても必ず連絡がついてしまうという意味で、人々の行動半径、そして情報の拡散する半径が非常に広がってきております。もちろん各家々に置かれているパソコンにしても同じだと思っております。一瞬にして不特定多数の人に、たくさんの人々に情報が行き渡っていく、これは大変大きなことであろうかなと思います。

さらに、50年前を遡ると、どうでしょう、マイカーということが、それほどこの世の中にまだと言っていいくらい浸透していなかったこの時代、車というものが社会の移動手段として中心を占めている、それだけ我々の行動範囲というのは非常に広がってきております。

その中で、昭和の大合併以来の50年間、皆さんの生きる地域というのが変わっていながら、市町村の枠組みというのが変わってきたのか、そういったところを少し考えていただければと思います。これは、また後でご説明させていただきます。

とにかく、皆さん、人々の移動する範囲、それから知識を吸収する範囲、そういったものが一つ一つ広がることによって非常に便利になってきました。その便利さをこれからさらに引き続いて享受していこうと思うと、何かが変わっていける仕組みにしていく必要があるのではないかと、一つ問題提起をさせていただきました。

そして、今後50年間のことです。これは、たった一言で、まず申し上げることができます。少子高齢という社会です。子供が少なくなって、そしてお年寄りが増えていく。子供が少なくなるということ、これは、一つには社会の税金を払う人たちが減るという端的な事実と直面させられると。お年寄りが増えること、これ自体を否定することは社会自体の存立にかかわると。そうではなくて、お年寄りが増えていって、今までのいろいろな知識が増えていくこと、その知識を支えてくださったお年寄りを、これから社会がいろいろな手に手を携えて支えていくという認識、そういったものが大切になってくるという時代になってまいります。

少子高齢という社会、これは、まさにこれから50年にわたって続くことかもしれませんが、もうすぐですね、平成18年度、日本の人口の伸びがとまります。これはそういう予測が出ております。そして、日本の人口は伸びをとめて、これからは人口が減ってくると、そして50年後には、今いろんな予測がありますけれども、半分になる可能性もあるというような予測すら、非常に厳しい統計の中で出ている中で、それぞれの枠組みをそのまま維持していこうということが果たして可能なかどうか、そういうことです。これが一つの未来の描き方、この条件です。前提条件だとお考えください。

その50年間に渡る社会の変化、そして、今後50年間に渡る社会の変化の真ただ中に今という時代がある。その今という時代は、じゃ、どういう時代なのか、これは私のこの緑色のところ、これに出ています。私、最近はやりのパワーポイントというがありまして、あれ、すごく格好よくて使いたいのですけれども、私の上司から言われました。「おまえの声というのは、どちらかというと低くてくぐもっているから、午後の講演会のときにパワ

ーポイントを使って会場を暗くすると、結果は目に見えているぞ」というありがたい言葉をいただいて、ああ、上司というのはありがたいなと思いながら、結局はやる技術がないことを隠しながら、こういったものを用意してございます。

これをご覧ください。真ん中辺に絵がちょっと描いてあります。矢印が下がっています。これは、とにかく税金がこのままだと減りますよということなのですね。税金の入ってくる額が減っていく、しかし、役所のやる仕事、国のやる仕事をこれから減らすことができるか。まさに少子化、子供が減るのだから、子供のお金を減らせばいい、そんな乱暴な議論は逆にできなくて、子供が減ればこそ、その子供たちに対する対策、それからできる限り子供を増やしていけるように、そういった社会になっていけるような、安心して子育てができるような施策を打っていかなければならないでしょうし、一方で、増えるお年寄りたちに、これまで社会を支えてきてくださったことへのご恩返しとともに、安心できる社会を築かなくちゃいけないという時期に来たときに、仕事を減らせばいいじゃないかと、税金に合った仕事をすればいいじゃないかという乱暴な議論はできようはずがないということになると、その差はどこにあらわれてくるかと、これは、単純な話です、入りが減って出がふえる、出が同じなら、その差は借金という形になると。

今の日本というところ、どういう国でしょうか。平成15年度予算というのは、約81兆8,000億円、皆さんはどうかわかりませんが、私のような、平均的日本人になりますと、81兆円なんていう数字を想像してみてくださいと言われても、なかなか想像できるものではないと。よく財務省の方が500兆円の負債がある、借金の残高としてありますよと、500兆円、国はローンを抱えています、こんな説明をされますけども、そのときに、その500兆円ってどういう規模だろうというときに、1万円札で積み上げると富士山の高さの何倍とか言われているのです。

それで、余り100万円の束を見たことのない人間、私のような人間に向かってそういう説明をされるとムカッときますので、絶対に何倍という数字だけは覚えまいと思っているので覚えていないんですけども、皆さんは想像つくでしょうか、500兆円、地方自治体が抱えている借金合わせると700兆円。

こうなると想像がつかないので、村上龍さんという作家、ご存じでしょうか。「あの金で何が買えたか」と、こんな本を昔、ちょっと前ですけども書いています。その中で、現みずほ銀行、旧第一勧業銀行に9,000億円の公的資金が投入されたと、「9,000億円で何が買えたのでしょうか」と、この言葉の中に、説明として、全世界の発展途上国、世界がもし100人の村だったら80人が住んでいると言われる全世界の発展途上国、その発展途上国の全員の子供たちに、読み・書き・算数の基礎教育を、学校を建てて先生を雇ってすることができる。でも、まだお金が余るので、アフリカゾウを9年間保護していくと。そしてスフィンクス、鼻のもげたのも全部きれいに直していくという、それで573億円のおつりがくると。それが9,000億円という額。これを約800倍すると、ちょうど日本国が抱えている700兆円という借金の残高になります。こういうお金が、皆さんが税金で払わなければならないローンとして、今、背中後ろにあります。

そこで、81兆8,000億円、この中身を見ると、81兆8,000億円、それはやめましょう、818万円ぐらいにすると少し私に近づいてきますので、818万円にすると。818万円の今予算があったとして、大体そのうちの借金、36兆8,000億円、これを368万円の借金ということで、41兆8,000億円という税金、これはいわゆる稼ぎです、これを給与とします。こんなふうになります。年収418万円の人が368万円の借金をして、818万円の生活を送っているのが今の日本という国の姿、こういうのは、恐らく個人のベースで見ると、銀行はもうお金貸しません、破産ということになってしまうわけですが、国の信用力でもって何とか動いていくと。

ただ、皆さん、これがいつまで続くか、こんなふうに思ってみられてはいかがですか。というのは、ほぼ年収に匹敵するお金を毎年毎年借りなくてはいけない、その背後には5,000万円のローンが抱えてあって、それが減るところか毎年毎年増えていく、こういう現状を放置しておくとうどうなるか。子や孫が払う税金が増えていく。ただでさえ子や孫のときには税金を払う人々の数が減っていくわけですから、1人当たりが払う税金というのは増えていくわけです。今のまま放っておいても。

これは借金が増えていくということで、その借金、だれかが打ち出の小づち振ってくれるわけじゃありませんから、借金で返すわけです、後の世代。そうなってくると、ただでさえ減っていく人たちの力でもって、増えていくお金を返さなくてはいけない。であれば、今私たちの世代でできることは、できる限りやっつけていかなくてはいけないのではないかという思いが、私、子供の顔を見ているといたします。

いずれは来るときが来る、いずれは来るべき何かがあるのだろう、それは今の世代でできる限り回避しなくてはいけないということで、こんなお話をご紹介します。ある中学生が統一地方選のときに書いた作文です。「大人たちに将来何を望みますか」という話を聞かれて、「そのためにあなたはどんなことをしたいと思いますか」と、選挙ですからそういう話だったと思います。そういうことで作文を書いてくださいと言われても、「今の大人たちは、私たちに何をしますかと問うのではなくて、私たちは私たちですべきことはします。ですから、今生きている大人たちがやるべきことをやってください」と、そういう中学生の作文、ずしりとくる作文だなと私は思って、その作文の朗読を聞いておりました。

それで、今やるべきことというのは、じゃ何なのか。そこに私の、緑のところへ書いてありますけども、少子化というこの流れは、将来に対してでき得る限りくい止めたいと思うのですが、それが果たしてどこまでということになると、できる限り過去に残すもの、負の遺産は少なくして、できる限りよい遺産を残していきたいと考えるのではないのでしょうか。

その中で、今、別のといいますか、市町村合併と方向は同じなのですが、動きがかなり前からあるものがあります、その名前が地方分権という名です。これは、できる限り住民の皆さんに近いところで、住民サービスをしましようということで、端的に申し上げれば、今まで国がやっていたこと、県がやっていたこと、できる限り市町村という基礎自治体で



するようにいたしましょうと、このための仕組みづくりを分権という形でしていきましようという流れです。

それで、この流れ、これをどのように私は解釈するかと申し上げれば、50年前、中央一律、中央が決めてそこで行う、しっかりと、守るべきものは守ってやってきた仕組み、それをもって国民生活の、ナショナルミニマムなんて言葉がありますけども、それがだんだんと確保されるようになってきた。

そして、今ナショナルミニマム、世界に冠たる日本、そうやってきたその中で、次に進むべきは、力をつけてきている地域それぞれに合った仕事を地域が地域のお金ですべきとき。そのためには、できる限り国がやっていた仕事を都道府県が、都道府県がやっていた仕事を市町村が、あるいは国がやっていた仕事を市町村がという形で、住民に近いところでサービスができるようにした方が、地域の人々の考えていること、それをとらえながら仕事ができるのではないかと、こう思います。

そのために必要なことはいろいろありますけども、今、世界の人々がどんなふうにも物を考えているか。特に、ヨーロッパの方ではどういうふうにも考えているか。これは、個人でできることは個人でしましようということなのですね。個人でできないことは家族でしましよう、家族でできないことは地域でしましよう、コミュニティでしましよう、コミュニティでできないことは、初めて市町村役場がしましよう、市町村役場ができないことは都道府県が、そして都道府県ができないことは国が、国ができないことは国家連合がということになっています。

この言葉の中で大事なポイントというのは、個人や家族ができることはコミュニティが手を出してはいけない、コミュニティができることは市町村役場が手を出してはいけない、市町村役場ができることを都道府県がやってはいけない、都道府県ができることを国がやってはいけないということだろうと思うのです、そうすると、役所のレベルで一番近いところというと市町村役場、その市町村役場ができることを増やしていきさえすれば、できる限り地域に合った仕組みというのがつくれるはずなのです、ということになるのではないかなと思うのです。

今私が申し上げたことというのは、50年前を振り返って、この来し方50年、そして行く末50年を見据えたときに、今という時代がどういうところに置かれているかを申し上げたわけですが、その中で、じゃ、市町村合併というのをどういうふうにも考えるかを、次のページで説明させていただきます。

地方分権ということですが、それは市町村の立場からいうと、財政的にも、それから職員の充実さでも、足腰強くというのが一つの考え方だろうと思います。足腰の強い市町村を今築き上げていくということだろうと思います。ちょうどこの2ページ目の下の方の図をご覧ください。これは、実は私の図、管理のところに網かけがしてあったのです。サービス、管理と書いてあって、管理のところに網かけがしてあったので、ちょっと見づらくはなっていますけども、要は、言いたいことはこういうことです。

A市、B市、C町、D町、E町、こういった2市3町それぞれがサービスを行っている、

それぞれに管理、つまりお金を配分したり、人事を決めていったりするお財布のようなところがあると。それで、5つのお財布というのは、それぞれ別個に持っているは、それぞれが大きくなっている、それを一つにまとめてみると、お財布って5つを1つにまとめてもそんなに大きくする必要はないわけで、必ずそのところに、うまくあいにすきができてきます。あきができてきます。5つを1つにまとめたときにすきができてくると。ここが大事だと思います。

市町村合併をすることでよく言われるのは効率化ということですが、効率という言葉は、これは非常に誤解を受けやすい言葉で、効率が切り捨てという言葉につながってしまうと大きな誤解になっていくと。

11月にしては非常に陽気がいいものですから、私の方は熱がこもっているなど、自分でも思っていたのですが、それはやっぱり陽気がいいのかなと思いますので、皆さん方、どうぞ楽な姿勢でお聞きください。私の方は、こうやって一所懸命話していると、どんどん熱が入ってきますので、皆さん方どうぞ、どうかお気楽な姿勢でお聞きください。

市町村合併の一つのポイントですけれども、効率化という言葉、これが切り詰めるとか、かつかつの生活をするとか、そういった言葉に転用されていくと非常に大きな誤解になると思うのです。それで、市町村合併で求められるのは、5つに分かれていた管理をするところ、それは民間企業にお勤めの方ならよくわかる話ですが、固定費というのがあります。これを1つにまとめる。あるいは、主婦の方であれば財布ということにしてください。それぞれのご家庭にある財布、それを、1つにまとめてみると、それまで持っていた財布を5つまとめるよりも小さくてできるかと思います。5つのばらばらに小さいところがあって、それを1つにまとめると、管理をする固定費というのは小さくて済むはずで。

そうすると、小さくて済むのであれば小さく、その部分はすればいい、ただし、住民の方々に直接サービスを提供する部門、この部門については、人数を減らしたり、サービスを落としたりすることなく維持させる。そうなってくると、管理の部門の効率化、その部分がずっとスリムになってくることで、今まで使うお金というのが少し減ってくると同時に、その部分で少し人間が減ってきます、役所の人数が減ります。

それで、減った人数をどうするかと申し上げれば、専門的な仕事を抱えていく職員を採用、職員を増やすという方向につながる。つまり、直接住民の方々にサービスを提供することのできる部門の人たちを減らすことなく、さらに専門的な能力を高めていって、一方で、5つの財布を1つにすることで、管理をする部門、これをスリムにしていく。そのスリムにしていったところで、今まで、先ほど何度も言いましたけれども、減っていく税金に対して仕事が減らないのであれば、これは借金でいくしかないわけですが、仕事を減らすというところを管理を減らすというふうにしていく、財布の数を減らすというところで帳じりを合わせていくと。皆さんへ、直接住民の方々に提供されるサービスを決して落としてはいけないという条件が守られるということです。これが、一つの市町村合併で言われる効率化という言葉の意味にとらえていただきたいと思います。

効率は、切り捨てでも、かつかつの生活でもなくて、市町村合併という方向をとる限り

においては、皆さん方、直接サービスを受ける方々に対しては、そのサービスを提供する職員の数、あるいは専門的能力、そういったものは下げるどころか上げていく。それで、専門的能力は上げていくという点です。その点をご理解いただきたいと思います。

そして、上になりますけども、市町村合併で自己決定というふうの内容を、具体化していく、これはどういうことかという、先ほど私申し上げました。個人でできることは個人がやって、という話から始まって、市町村ができることは、できる限り市町村がやれるように、都道府県がその仕事を奪わないこと、住民の人に最も近い役所がすべきだ。それは、地域それぞれが今求めているものに対して、すぐにこたえられるようにという気持ちからです。

そうなってくると、それを支えていく市町村役場、まさに市町村役場というのは、行政サービス、保健、福祉、教育、土木、さまざまな行政サービスの総合デパートでございます。この総合デパートとしても、能力を、力を高めていくこと、それが市町村合併で期待される地方分権であろうかと思えます。

どういうことかと申し上げれば、今の制度の中で、ちょうど今皆さんのこの2市1町ですけども、合併を果たしていくと、ある一つの規模になる、そうなってくると、その規模であればこそできる仕事というのが、また増えてまいります。つまり、今までは県が行っていた。名古屋市内にある県庁というところが一律的に行うサービスの中に入っていたものが、皆さんの市が行うサービス、新しい市が行うサービスとして提供できる、これは非常に大きな違いがある、なぜか。

皆さん方が選んだ首長が市長、そして議員さんがその決定権を持った上で、責任を持った上でサービスを執行していくと、皆さん方の声の通りやすいところでサービスを執行していくというところによってまいります。その点をご理解をしていただければと思います。自己決定できる内容の拡大ということだと思っております。自己決定、皆さん方が暮らしているこのまちで決めていくことのできる範囲が広がってきますよという内容であります。

それで、そうなりますと、先ほどから効率という言葉、広い範囲で一括して提供すれば効率がよくなる、それから広いサービスが提供できるようになる、でも一部事務組合という名前をご存じの方は、既に広い範囲でやっているのではないかと、市域を超えて、町域を超えてやっているのではないかとのお話が出てまいりますけども、このところと、一つの市が責任を持って提供するということは、話が違ってまいります。

はっきり申し上げれば、その市が提供するサービスであれば、皆さんの声を市長さんに直接話していただいて、そして、市長さんもその声を酌み取っていただいて、ご自分の政策へと反映していく。しかし、それぞれの市町が持っている一部事務組合というこの組織、これが果たしてきた機能というのは非常に私は大きいと思えますけども、やはり一つの市として、大きな市としてやるサービスになっていく、多分違いはないのではないのでしょうか。皆さんの声をどうやって使うか、その点をご理解していただければ、はっきりと顔の見える市長さんに伝えるのと、一部事務組合という組織に伝えるのとでは若干異なってまいります。

といったところから、足腰が強いという言葉、もう一遍整理させていただきます。これから暮らしていく子供や孫のことを考えると、今ある借金、自治体レベルで200兆円ですけども、その借金はできる限り残さないように、増やさないように、それでいて、今あるサービスは、できる限りサービスの質のよいものを維持できるようにという世の中をつかっていく私たちの世代の役割があるとすれば、そのためにやるべきことは、できる限りの無駄をそぎ落とすんだと。

それで、無駄というのは、今の市町村の役場が無駄をしているということではなくて、合併をすることで一つになればそぎ落とせる、そのことを言っておりますけども、合併をすればそぎ落とせるその部分は必ずあります。そして、その部分というのは管理の部門。管理の部門がそぎ落とせることによって、これはやっぱり3つでやっていたものを1つでやることで、効率化、お金を使う額というのは減ってまいります。

それで、一方で直接サービスをする部門というのを減らさない、落とさないということができるばかりか、管理の部門をスリム化したこと、身軽にしたことで生まれてくる人員を、専門的な仕事をするとところに充てていくということで、サービスの制度も質を向上していくということが考えられるのではないのでしょうか。

そして、さらに、自治体の規模が大きくなるということは、広い範囲でサービスを受けるといふことにとどまらず、今あるサービス、県が行っていたサービスを、さらにこちら、今の2市1町が合併した場合の規模で行う自治体が受けることができるということになります。そうすると、直接顔の見える市長さん、議員さんたちが執行していくサービス、行政の方々に執行していくサービスということにまさに変わってくると。その点でも皆さんの声がより届きやすくなると。その例を挙げれば、保健所ですとか環境行政とか、そういった部門、まさに皆さんの生活に直接密着した部門のサービスになってまいります。

このところ、既にいろんな形で合併という議論が皆さん方の間で始めているころかなという気もいたします。今、私は一方的に市町村合併のメリットということをお話いたしました。効率化ができますよと、それから効率化ということは、切り捨てでも、かつかつの生活をなささいということでもなくて、使わなくていいお金を使わないようにするだけでなく、使うべきところにはちゃんと使えるようにしていくのが市町村合併の効率化なのですよと。そして、広い範囲のサービスがさらにできるようになりますよと、いいことを一つ一つ並べてまいりました。

一方で、市町村合併に慎重な立場をとられる方々から出される懸念というものもいっぱいあるのかなと思います。それについて触れなければ、これはやっぱりフェアとは言えないと思いますので、私の考えを述べさせていただきます。まず第1に、それぞれの地域、コミュニティですけども、コミュニティが廃れてしまうのではないかと、自治体が大きくなれば、その中のコミュニティというものがだんだん廃れてしまうのではないかと、こういった懸念、あって当然かなと思います。

ただ、これに対しては、一つこんな話があります。これは私、直接聞いた話ですけども、まちづくりを中心に担っている方々の話です。三重県の方でまちづくりを中心に担っ

ている方々のところに、非常に先進的な取り組みだということで視察に見えられた行政の方々が、こんなことをおっしゃいました。「もうこれなら、行政は皆さんに任せられますね」と、こういう言葉だったそうです。それに対して、まちづくりを進められている方ははっきりと一言申し上げられました。「任せられるからやっているのではないし、任せられたからやっているのではないし、自分のことだからやっているのです」という言葉なのです。

それで、この言葉、よく今パートナーシップという言葉が使われますけれども、非常に的を射た言葉だと。パートナーシップ、助け合いましょう、どうでしょうか、こういうことよりも、パートナーシップ、一人一人が自分のやるべきことはしっかりやり抜くと、これがパートナーシップの正しい見方と私は思っております。つまり、行政は行政のやるべきことをやる、地域の方々、コミュニティの方々、皆さんのやるべきことをやる、これが正しいパートナーシップのあり方かなと、私は考えております。

そこで、もう一つの話をしていただきます。既に、市町村合併を果たしたある県の方のお話ですけれども、それは、4つの町が合併して一つの市になりました。4町合併で1市でございます。その方々の話ですけれども、「我々は、4つの自治体が合併して、4町が合併して1市になったとは思っていません。4つの自治体に、それぞれもともとあった合計19のコミュニティが一つの市になったと私は考えている」と。

つまり、合併するとコミュニティが廃れるのではないかと、地域活動が廃れていくのではないかと考えるのではなくて、もともと地域活動を担っている方々がいる。その方々がいる限り、続けようという意味がある限り、これは廃れる、廃れないの話ではなくて、合併というのは、むしろ一つの大きな中で、そのコミュニティがさらに切磋琢磨していき、お互いが個性を伸ばしていける、そのような土台を築き上げることができると、そういった懸念に対しては答えられるのではなからうかということです。

そして、第2点ですけれども、人口規模が大きくなると、きめ細やかなサービスができなくなるのではなからうかと、こういった懸念。これについては、よく考えていただきたいのですが、人口規模が大きくなるということは、これは財政規模も大きくなるということです。そのときに、財政の規模が大きい今のさまざまな政令市とか見ていただくと、そういった規模の大きいところの住民サービスというのは、劣っているのかどうか。

これは、さまざまな比較の仕方があると思いますが、財政規模が大きくなるということは、それだけいろいろな形で自分たちの自由にできるお金の幅も広がっていくということです。それと、先ほども申し上げましたけれども、お金以外において、人の面とか職員、実際に行政サービスを提供する職員の方々の話ですけれども、合併をすることで、先ほど申し上げましたように、管理のところは効率化される、その人数は減らすことができる、その部分を、全員ではありませんけれども、専門的な職種の方々に振りかえていくことができる。それだけ専門的なサービスの提供が可能になっていくと考えられないでしょうか。

そうなることで、きめ細やかなサービスということですが、もう少し申し上げれ

ば、財源と職員の配置から、きめ細やかなサービスができるということだけではなくて、大切なことは、新しくでき上がっていく自治体のまさに心構え一つなのだろうと思うんです。きめ細やかなサービスをするには、住民の皆さんの声を取り入れていく努力、聞いていく努力、こういったことをするかしないか。果たして大きな市はすべてそういうことをしていなくて、小さなところは、すぐそういうことをしていると単純に言い切れるものだろうか。

恐らくは、これはそれぞれの自治体の努力の賜物であって、住民の皆さんの声をどこまで聞いておられるかどうかというのは、努力の賜物であって、そういった努力を、お互いに住民の方々と行政の方も一緒にやっていく、お互いにできるところはやって、やりながら声を出し、そしてその声を聞くということをしていくことで、きめ細やかなサービス、これに対しての不安というのは、かえってそれを、合併をするからこそきめ細やかなサービスがやりやすくなるというふうに考えられはしないかと。

そして、3番目ですね。3つあった役所が1つになると、いろんな選択肢があると思いますが、今まででしたら近いところに役所があったのに、1つになったらどうなってしまうのだと。そういった懸念につきましては、よく考える必要があると思います。

今ある役所が、そのまま合併とともになくなってしまうとか、それはあり得ます。その役所の位置というのは、はっきりと支所、ないし、いろいろな形でこれから検討されていく、住民の皆さんに不便を来すような形で、今後の役所のあり方を考えるのではなくて、住民の皆さんの利便を考えた形で役所のあり方を考えていくというのが、今合併協議会で進めている内容ですから、そういった立場を恐らくは声としてはっきり伝わるのではなからうかと。

それで、もう一つ、役所で行われる住民サービス、窓口サービス、確かに遠くなるからということですが、これは、今ある出張所、支所などで経験もされておられるかと思いますが、もう一つ、さらに電子自治体などというものも今後さらに進みつつあるでしょう。そういったものでも、皆さんの利便性というものが確保できます。それで、電子自治体でできない部分についても、直接サービスを受ける部分についても、今あるサービスを落とさないということで、今、支所、出張所の形式というのは十分に機能し得る。それで、どのような場合に、その遠くなるのが不便と感じられるのかということ、正直なところ、その不便になるのかなというものが思い浮かばないです。

今、私は幾つかデメリットと呼ばれるもの、懸念と呼ばれるものについて申し上げました。ただ、これから皆さんの不安、懸念というのは、ある大きな市でもあるかもしれませんが、申し上げておきたいのは、今申し上げたデメリット、不安、そういったものは、一つ一つこれから合併していく話をしながら、どういうふうにして解決していけばよいだろうか。そして、実際にそれを解決して、合併をしてよかったと言っている自治体の方々の先進例を聞きながら、解決し得ることがほとんどだと思っています。

そして、一方で、先ほど申し上げました合併をすることのメリット、利点、こういったものについては、恐らくは合併をしなければ手に入らないであろう利点であろうと思

います。つまり、合併にあっては、メリット、デメリット、いろいろな整理の仕方が出てきます。十分議論しなければいけませんけれども、メリットについては合併あればこそそのメリットであって、デメリットについては、一つ一つ考えながら未来に向けて解決していけることであろうと考えるなら、今皆さん方と一緒にここで考えていきたいのは、じゃ、そういう方向で進むのであれば、50年後、私たちの子や孫が暮らす社会を考えたときに、何をどのようにすればよいか、合併についてどのように考えを決めていけばよいかということに尽きるんだらうと。

さまざまな個別の議論がこれからもあろうかと思えます。一つ一つの議論が非常に皆さんの生活に密着した大切なものであります。と同時に、一つ一つの今の議論と、50年後、私たちの子供や孫が暮らす世の中を進める議論とが、そのどちらが優先されてという考えでは決してないのです。今私が思いますのは、自分の今の時代、この時代をやはり幸せに乗り切りたいという意見が当然にあります。

と同時に、これから生きていく子や孫の時代が、より幸せに、未来の明るい社会になってもらいたいという気持ち、これも本当に自分を大切にすることと同じ思いなのです。そのときに、目の行き先を、この世代だけに向けていいものかどうか。皆さんがそうだと申し上げているのではありません。私自身に投げかけている言葉です。ですので、そういった点、また今日のパネルディスカッション、あるいは今後のさまざまなメンバーの方々の間での議論の中でも、ひとつ考えていただきたいと思えます。

それで、最後の方になりますけども、3ページ目の方になります。

私は、なるべく私自身が聞いた、あるいは見た、そういったことを中心に話していこうと思っております。大学の教員ということですけども、私自身、大学院を出てから最初に始めた仕事というのは、目の不自由な方のリハビリテーション指導員という仕事、これを一番最初に始めました。人生途中で視力を失った方々が、どのように家庭や、あるいは学校や職場に復帰していくのか、それ助ける、白い杖を使ってまちの中を歩けるように、点字を覚られるように、その訓練師が私の仕事の最初です。

その時々で得た経験というのは、いつも現場の中であって、そして、この人たちの言っていることに耳を傾けて、しかし、言うべきことは言って、議論を大切にしているという、これに尽きるものはなかったと思えます。たった一人の私ができること、できないこと、幾つもの経験させてもらいましたけども、1人であればこそできること、その1人の力が結集すれば非常に大きなものになるというのも、その仕事をしながら、そしてその後、さまざまな仕事を体験しながら感じ取ってきたところでもあります。

まさに、そのようなつもりで今話しておりますのも、時に書生っぽい話に聞こえるかもしれない、理想論を語っているなという思いを皆さんに抱かせるかもしれない。しかし、常に私の頭の中に、気持ちの中にあるのは、自分自身の子供の、この子の生活であり、社会であり、それから、私が20年前に担当させていただいた、人生途中で視覚を失った方々のその後の力強い生き方であり、そういったものが、今後この世の中を考えていくときにはどうしたらよいかというときには、今自分のこと、大切に思うことと同じ思いで、世

界のこと、社会のこと、地域のこと、そして未来のこと、いろいろな観点から考えなければいけないというところにあるわけですね。

ですから、非常に話としては広がってまいりましたが、世界のことやら、あるいは50年後のことやら広がってきましたけども、常に私の軸足というのは、そのやはり20年前の現場にあり、また、自分の子供のことにあるというところをご理解いただければと思います。

最後に、こういう話の中で最後を締めくくるのは、非常に現実的な話を申し上げます。

市町村合併、これを今果たしていかなければならないのは、過去からの積み重ねである借金、そして、現在の経済の停滞、そして少子化、高齢化といった未来の問題、こういったものを解決していき、過去の負の遺産を清算し、そして未来へ向かって新しい財産を起こしていくと。そういったところに今あるから、この時期に市町村合併をとということですけども、なぜ今皆さん方に考えていただきたいかという、やっぱり一つ時間の問題があります。

というのは、国が市町村合併に向けて、市町村合併はこの時期までと。具体的に言えば、平成17年3月31日までに果たしたところには、これだけ苦しい財政を支援することができますといったメニューを幾つも並べている。申し上げたいのは、こういったメニューというのは、今その流れの中におらなければ、もうないということです。絶好球が皆さんの目の前に来ているのに、それを見逃すのであれば、その後どうしたらよいかを考える責任がやはりあると思うのです。絶好球が来たのなら打ちましようという非常に単純な結論ですけども、この言葉に尽きるのではないのでしょうか。

その絶好球、どういう絶好球かという、今いろいろ財政がきつい、きついと言っているけれども、この財政がきつい中で新しい市をつくっていけば、その市が必要なものについて、できる限り有利な条件で財政の支援を国が責任を持ってしていきましようということでございます。地方交付税なんていう話も出ていますけども、これは税だという言葉があると、税が多くなるとか、地方交付税が増えるなんていうと、税金が増えるだろうというような誤解をしないでください。

これは、あくまで国から自治体にやってくる、使い道を定めない、こうしなさい、あしなさいという具体策を言われたい非常に使い勝手のいい補助金だと思っていたら結構です。そういったものが、かなりの額で入ってきます。それを皆さんの前に今受け取るための条件を揃えつつあると。それは残念ながら期限つきなのですね。ですから、今議論を盛り上げて、その絶好球を受ける、そういったところに皆さんに行っていただきたいと思うのです。という思いが、いろんな自治体の方の中にあるのではないのでしょうか。

そして、その絶好球を打つことで、なかなか先が描けなかった、この財政を乗り切る、そして、新しい自治体として大きな夢を描いていく、その建設計画に、新しい市の建設計画を描いていくと、そういったところにまだ話を進めていけないのでしょうかというものであります。

それを一つ一つここで申し上げますと、足りないほどの支援が今国の方で用意されており



ます。その支援というのは、もう時限で決められておりますので、その中で皆さん方が選ぶときのものですが、これについても、平成17年3月という期限を皆さんの中でご理解いただきながら見ていただきたいのですが、ただ、そのお金が来るからやるのかといった話になれば、そのお金の使い道を考えていくということに話を持ってきていただければと思います。

さまざま、私がここで話してきて、ここでもう一回、一つ一つ整理をさせていただきます。まず、なぜ今市町村合併という話がこのような中で出てきているのかと。よく考えてみていただくと、昭和30年代、昭和の市町村合併が、ほぼ落ちついたころの世の中、自転車で動いている人が多かったその時期から、今はもう車というものが皆さんの足になっている。それで、皆さんの動く範囲、それから情報が郵便というもの、電話の数が少なかったという時代が、電話はもとより、eメール、パソコン、携帯電話と、身につけて歩く電話というもので非常に広い情報の交換が行われるようになってきた中で、さあ、市町村の区域というのはどうだろうということになります。

皆さん、生活の範囲というのが広がってきている、市町村の区域がそのままであると。このときに、市町村の区域に皆さんの生活の範囲を合わせてくださいというのか、皆さんの生活の範囲に市町村の区域をほぼ合わせてくださいというのか、それは、答えはおのずと決まっております。たった一つしか答えはないと思います。であれば、できる限り皆さんの生活、動きの範囲の中でやっていただいた方が、仕事も非常にやりやすくなるのではないかと、支援もできやすくなるのではないかと、時代の変化に合わせた市町村合併という考え方。

それと、財政危機という、これを乗り切るために、打つ手はいろいろ考えてみても、税金が減っていく、子供が減ればさらに減っていく、その中でサービスを落とすことができないとなると、どうなっていくか、借金しかない。その借金ももう限界まで来ている、どうすればいいのか、打つ手はもう打ち尽くしたというときに、残された手というのは何かあるのか。

今、踏み出すことで、自分に良い球が飛んでくる、財政の支援が受けられる、それだけでなく、財政の効率、切り捨てることではなくて、合併をすれば要らなくなる部分、やらなくていいですよという、つまり管理の部分をスリム化して、その部分をサービスの充実に充てることができる。この財政というのは、非常に大きく、各自治体を襲ってまいります。各自治体を襲ってくるということは、皆さんの生活も襲ってくるということだと思います。

そして、地方分権という考え方、これは今まで国が一律でやっていた、やっていたからこそできていたサービスというのは確かにあります。しかし、既に国が一律でやって戦後を乗り切り、そしてナショナルミニマム、最低限の生活保障というのも、ほぼ全域で果たされるようになったこのときだからこそ、今地域が地域の個性をもって築いていかなければならない、そういった時代になっていくというときに、地域が地域の個性を築いていくための力というのは、市町村にこそある。

なぜならば、一番身近に、地域にサービスを提供しているからということになる。その市町村の力を大きくしてあげる。力を大きくするということは、人口規模を増やすことによって、先ほど言葉は使いませんでしたけども、中核市という一つのレベルアップしたところに入ると。そうすると、できるサービスの範囲が変わってまいりますということもありますね。

そういったところで、できる限りいろいろなサービスを、皆さんに最も身近な市町村役場が提供できるような、そうすることで、皆さんの声は、直接、皆さんが選んだ市長さん、そして議員さんのところへ届けられるようになりますと、そういったこともあります。そして、今を乗り切っていく、未来の少子化、高齢化、こういった問題についても、社会の明るい未来を描いていくことで、皆さんの子や孫が生活していく社会が非常に足腰の強い社会となって、今後存続していくのだという安心が得られるのではないかと、そういったことを何度か繰り返し、繰り返し申し上げてまいりました。

その中で、最後に申し上げたことは、現実的な支援が用意されていますよということです。現実的な支援が皆さんの手元に用意されています。その現実的な支援というのは、これは財政の非常に難しい時代に陥っている市町村にとってはかけがえのない支援だということ。それで、そのかけがえのない支援、絶好球が目の前に来ている、それを見逃すのですかと。見逃すのであれば、見逃したなりに、どうやっていこうかという方策を考えなければ、見逃すということにはならないのではないのでしょうか。その責任は、まさに見逃すという人は、どうやっていこうかということをはっきりと明示していただかなければ、反対のための反対、懸念のための懸念にとどまっていく。

そして、先ほど申し上げましたように、幾つかの市町村合併の懸念、とことん皆さんの間で議論していただきたいと。していただくことで、この一つ一つの懸念というのは払拭していけるものだという信念を持って取り組んでいただきたい。なぜならば、先行して市町村合併を果たしてきているところ、一つ一つの懸念を懸念でないという形で乗り切っている、乗り切っている努力もまたされておるわけです。その努力をする姿、そういったものを皆さん方にお伝えすることで、懸念を懸念でなく、払拭していきたいと。

それで、一方で、合併することのメリット2点、先ほど申し上げましたように、国からの財政的支援が得られて、今までできなかったことを一つ一つ順序立ててやっていくことができる、そういったメリット、あるいは財政の危難を乗り切っていくことができる、そういったメリット、これは合併すればこそ得られるメリットであるという点をご理解いただきたいと思います。

そして、今後またパネルディスカッションでもお話が、今度はもう少し具体的に各市長さん、町長さんから出るかと思えます。またこの協議会の委員さんから出るかと思えますけれども、その2市1町の地域にはどういった未来を描くべきか、そういった点を、今度は、また皆さん方と未来の夢を語りたいというふうに思っております。

私は今日、最初話し始めたときに、非常にこの台から立ってきれいな風景が見えることに気が付きました。皆さん方を見て、非常に気持ちよくなっている方を見ると、ちょっと

傷ついたりしますので、なるべく外の方、遠方向を見ながら話をしていたのですけれども、冗談ですけども、このきれいな地域を50年、子や孫の時代をじっくり見て、自分たちも幸せになり、その自分たちの幸せと同じ幸せが子や孫に残せるんだという信念を、お互いに夢とともに描きながら、この合併という話をしていきたいというふうに願いたいと思います。その願いを込めまして、私の講演の締めくくりとさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。（拍手）

司会

ありがとうございました。稲沢先生には、また後ほど行いますパネルディスカッションでも、コーディネータとして参加をしていただきます。本日は大変貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございました。どうぞ皆様、いま一度、稲沢先生に盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

ありがとうございました。

ここで10分ほど休憩をとらせていただきまして、午後2時20分よりパネルディスカッションを始めたいと思います。10分間の休憩をとりまして、2時20分よりパネルディスカッションを行います。どうぞよろしくをお願いいたします。

午後2時10分 休憩

午後2時20分 再開

司会

皆様、お待たせをいたしました。ただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

パネルディスカッションを始めさせていただく前に、こちらから簡単ではございますが、出演者のご紹介をさせていただきます。また詳しい自己紹介は、ご発言の中でお話があるかと思しますので、よろしくをお願いいたします。

まず、会場の皆様から向かって一番左にいらっしゃいますのは、先ほど基調講演で講師を務めていただきました、四日市大学助教授、稲沢克祐先生です。引き続きコーディネータをお願いいたします。

続いて、その右にいらっしゃいますのは、合併協議会の委員でもいらっしゃいます、翻訳・作家・国際理解講座講師の杉本尚美さんです。

続きまして、谷一夫一宮市長です。

続きまして、丹羽厚詞尾西市長です。

そして最後に、山口昭雄木曾川町長です。

それでは、稲沢先生、よろしくをお願いいたします。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

皆さん改めましてこんにちは。このパネルディスカッションのコーディネータを務めさせていただきます稲沢でございます。

と申しましても先ほどの私、講演で、大分皆さんの顔も拝見して、私のお話もさせていただきます。コーディネータの役割は、できる限りパネリストの皆さんのご意見をた

くさん引き出すことと心得ておりますので、今日はそちらにお並びの4人の皆さんのお話を皆さんにお伝えできるようにしたいと思いますので、よろしく申し上げます。

こちら、今お集まりの4人の、杉本さん、それから谷市長さん、そして丹羽市長さん、そして山口町長さん、皆さん当然のことながら、それぞれの自治体を代表され、あるいは、こちら杉本さん、合併協議会の委員として座っておられると。それで、4人の方、それぞれ今合併につきまして、さまざまな観点からお話を進められている最中だと存じますので、そういったところで、具体的なご意見、観点、あるいは将来像、そういったことも盛り込んでお話をお聞きできるのではないかと考えております。

つきましては、最初ですね、まず先ほど司会の方もおっしゃっていましたが、自己紹介も含めまして、どのような立場で市町村合併に取り組み、努力をされているのか、その考え方など、途中にお話をいただきます。あらかじめ発言の順序というのは、これは決めておりますので、恐縮ですが、谷市長さんからお願いいたします。

谷 一夫合併協議会会長

改めましてこんにちは。冒頭ごあいさつをさせていただきましたが、一宮市長の谷でございます。

この黄色い紙に、もろもろの合併の経過は書いてございますので、今さら申すまでもございませぬけれども、平成11年1月に今の愛知県知事の神田市長さんの跡を継いで市長に就任をいたしました。私は、ここにも書いてあるように、本職は医者でございまして、医者の仕事というのは、患者さんを診て、診断をし、治療方針を決めて治療をすると、これが医者の仕事であります。

市長の仕事も似たようなところがありまして、自治体の病状を十分に観察し、診断をして、治療方針を決めて治療すると、こういうことではありますが、診断はできても、なかなか治療は難しい。さまざまな治療法がありまして、どういう治療法をとるか、これもまたなかなか難しいところがございます。それで、医者と市長とどちらが楽しいかなんて質問を受けることもあるのですけども、これ、なかなか即答が難しい質問でありまして、どちらもそれぞれにやりがいがあるわけでありまして、今そんな中で、一所懸命市政をとらせていただいております。

どこの市町村もそうだと思いますけども、先ほど山口町長のお話にもありましたように、非常にこれ過渡期ですね。どこもさまざまな事情を抱えて、何とかしなきゃいけないという思いがあり、変えなければいけないのですけれども、急激に、どかんと変えるようなやり方をされる知事さんや市長さんもおられるであろうし、そうでない方もおられます。私の本職は外科医でありますから、性的に言うとぱっと切り開いて、悪いところを取り除いて、また縫い合わせてやりたいのですが、どうもこれはやっぱり自治体の場合は、それでは向いていない。漢方薬のように、いわゆるじわりと効いて知らない間に治っていたというのが市長としては多分名医だろうというふうに思っています。

従って、変えなければいけないけれども、ゆるやかな改革といたらいいのでしょうかね、少し時間はかかるかもしれないが、少しずつゆるやかに変えていって、何年か後には

変わっていたというのが理想だろうと、こういうふうに思っています。

就任して5年弱になりますけれども、一宮市でも教育の部門、あるいは環境の分野、あるいは借金など資金面の問題、そういったものも含めまして、ゆるやかではありますけれども、随分この4年ちょっとで変わったと自分ながらに評価をしております。この状態をこれからも続けていけたらというふうに思っております。

ちょうど今、総選挙の真っ最中でありまして、どんな結果が出るのか非常に興味深いところでもありますけれども、与党が勝っても野党が勝っても、どちらが勝っても、マニフェストに象徴されるように、日本の政治はこれからやっぱり変わっていくだろうと、そういう予感を持つわけでありまして、また、ぜひ変わってもらわなければいけない、そういう期待も持つわけでございます。

この時期、ちょうど今、稲沢先生おっしゃった、そのとおりでありまして、戦後50年、本当に高度成長で、右肩上がりの世の中でやってきて、もう今、成熟が頂点に達してバブルが弾けたと、こういうところに今来ています。ここから、先生おっしゃったように、高齢化がさらに進み、少子化が進展をし、その結果として人口が減っていく時代に入っていく。つまり、右肩上がりで来たのが、今度は右肩下がりになっていく、経済の方も、それに伴って右肩下がりになっていかざるを得ない。そういった大きな流れの中で、多くの自治体も、やっぱりこの流れの中から逃れることはできないだろうと、こういうふうに思うわけでありまして、成長期でずっとやってきたのが、これからは成熟期に入っていくと、こういうことだと思えます。

それで、今、私ども自治体は、いろいろやっておりますサービスというのは、言ってみれば成長期のサービスでありまして、先ほどこの新しいものをつくるよりもやめる方が難しいということをおっしゃいましたが、まさにそのとおりでありまして、どんどん成長期に伴って、サービスをサービスをと付加していったものを、そのまま引きずっております。

ところが、これから成熟期に入って、やはり一度みんなで考え直す必要があるのではなからうか。つまり、成長期にやってきたサービスを、これから成熟期に入っても本当に持続できるのだろうか。ここら辺が非常に難しい疑問点でありまして、これから合併を機に持続可能な地域の発展という、そういったことを目指すべきではないかと、そういうふうに思っております。

少子高齢化と一言で言いましても、なかなか皆さんもピンとこないかもしれませんが、簡単に説明を申し上げますと、今2003年ですから、2000年の国勢調査ですね、この統計で申し上げれば、65歳以上のお年寄りが大体6人に1人でした。これが2050年になりますと3人に1人をちょっと割り込むぐらい、2.8人が2.9人に1人ぐらいは65歳以上のお年寄り、ほぼ倍の高齢化率になっていくわけです。

しかも、65歳もまだ皆さんお元気ですよ、私もあと3年すると65歳になりますけれども、あと3年たったって、多分かなりぴんぴんしておるだろうと自分では思っておりますが、ところが、これが75歳になりますと、ごめんなさい、75歳がどんなものか知らないの、語弊があるかもしれませんが、これはやはり足腰に少し弱りが出てくるわけです。ある

いは、ちょっと医者通いが増えてくるわけです。場合によっては病院に入ったり、老人保健施設に入ったりする方も増えておいでになると。それがやっぱり75歳という一つの節目があるわけと、このように思うわけでありまして、この後期高齢者と呼ばれる人たちは、またものすごい速度で増えていくわけです。

それで、今は16人に1人ぐらいの割合です。それが50年後には5人に1人が75歳以上と、そういう時代がやってくるわけです。今の65歳以上のお年寄りと50年後の75歳以上のお年寄りの人たちがほぼ同じなのですね。5人集まったらそのうち1人は75歳というようなことになるわけでありまして、その時代に入りますと、今はまだ15歳から64歳の人たち3.7人で1人のお年寄りを支えているわけですが、50年後には1.5人で1人支えることになる。それで、そのときに今の予算では絶対持続できません。

ですから、今、年金がいろいろ問題になっておるわけです。ですから、そういうことを見据えて、やっぱりそぎ落とすところはそぎ落としていかなければいけない。整理していくところは整理していかなくちゃいけない、そしてまた、その高齢化に向けて、あるいは少子化に対して、新しい施策をどんどんやっていかなければいけない、そういった視点は、この合併については必要だろうと思うのです。

もう一つ、地方分権という視点がありまして、より大きな自治体にすることによって、行政能力を高めて、より多くの権限を獲得し、身近にとらえることは、身近な我々が判断をしてやろうと、こういうことになるわけでございます。私どもは今、37万という中核市を施行できる規模の合併を目指しているわけでありまして、愛知県が提示しております合併のパターンは、もう一つ実はありまして、稲沢・祖父江・平和をこの2市1町に加えた3市3町、このパターンが実はあったわけです。

この3市3町を選択するか、2市1町を選択するか、2つの方法があったわけですが、3市3町になってまいりますと、やっぱり幾つかの問題が一緒になるということで、相手が少なければ少ないほど話は簡単なのです。増えれば増えるほど難しいだろうと、これは客観的にだれでもそう思うわけでありまして、17年3月、合併特例法の期限内には、合併をしなければいけないという前提は持っておりましたので、もう少し早く我々がスタートして、5年ぐらい前に話し合いを進めればよかったわけですが、なかなかそういうわけにもいかなかったものですから、随分時間が迫ってしまって、その時点でどちらにしようか、こういうことでありまして、3市3町で合併すれば50万人の人口になりますが、今度は、政令指定都市に準ずるまちが出来上がります。

そういう選択肢ももちろんあったわけでありまして、ちょっと時間的に厳しい。そういう実現性が非常に低いものを目指して失敗するよりは、今は実現の可能な中核市でやっておいて、50万、100万というのはまた次の機会にこれは考えようと、こういうことで合併の枠組みを決めさせていただいたわけでございます。

今、2市1町、ある意味では、激論も交わしながら、仲良く話し合いをしておりまして、私どもとしては、今申し上げたように、どうしても合併は真剣に考えなければいけないというふうに思っておりますが、壊すつもりはないわけですね、何とかまとめる方向で激論

を交わしております。地区によっては、もう壊しちゃえという方向で、激論を交わしたようなところもあるようでありましてけれども、そういう方向はとりたくない、とらない、ということで、いろいろと相談をさせていただいております。それについては、またこの後の項目で触れたいと思います。

ちょうど10分ですので。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

ありがとうございます。谷市長さんからは、現在、時代の転換期、成長期のサービスが成熟期のサービスへと移っていく、そのときに、ゆるやかな改革、漢方薬、こういった一つのキーワードが提出されました。また、合併を機に持続可能なサービスへということから、中核市、改めて37万という人口の中核市という言葉が提示されました。より広い大きなサービスができるようになるということで、少子化対策、高齢化対策、さまざま打っていかねばならないサービスをするために、大きな自治体を施行するというキーワードが提示されました。どうもありがとうございました。

それでは次に、尾西市長の丹羽様、お願いいたします。

丹羽 厚詞合併協議会副会長

改めまして、皆様こんにちは。尾西市長の丹羽厚詞でございます。私は、4月の統一地方選で市長にさせていただきました。まだ6カ月目となりますので、初めてお会いする方も大勢いらっしゃるのではないかと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

市長にならせていただきまして、最初の冒頭のごあいさつでも、私自身は場合によっては任期が2年と考えて合併を推進していくと、そういった形で今合併の協議に入らせていただいているわけでありまして、少し尾西市の事情をお話しさせていただきたいと思っております。

と申しますのは、木曽川町の皆様方も関心があるかと思いますが、尾西市だけ住民投票をやらせていただくという形で話を進めております。これは、実は私の選挙公約でもあるわけでありまして、それ以上に、そのときから感じていたことなのですが、尾西市というのは、前から合併についての必要性については論じられてきました。もう10年も20年も前から一宮市と合併したらどうかと、それは商工会であるとか、青年会議所であるとか、そういうところから話が出されて、何度も協議の場には出てきたわけなのですが、全くそれ以降、具体化することはありませんでした。

ただ、ここに来て、前の市長さんも、合併については推進というお話をしてきたのですが、これについては、合併はいずれは必要だろうと、先ほど谷市長さんから言われたように3市3町という手もあるかもしれないし、じっくり考えていかなければいけないという、そういったお考えであったわけです。ただ、自分の考えとしては、もし合併をするなら今しかない、この17年3月の期限までに合併をしないのであれば、いずれするだろうという甘い考えでなく、とにかくその後は歯を食いしばってでもひとり立ちをして、尾西市だけでやっていかなければいけない、このどちらかの選択を私たちは迫られていると感じています。

そういったところにおいて、市長が変わった上に、そのスピードアップをされたわけです。市民の方々にとっては、合併というのは、もちろん進む話だろうけど、まだまだのことだと思っていた方もほとんどだったかと思います。そういった中で、何とか期限内、2年後に行くかどうか、決めていかなければならないという、そういった思いの中で、これは、住民投票で皆様に問うことが必要なのではないかと。

これは、合併の是非を問うときに、合併したらどうなるか、合併のメリット、デメリット、あるいは合併の必要性、そういったことを討論する前に、そんな急な話聞いていないぞと、住民不在ではないかと、あるいは民意が全く反映されていない、そういった思いにおいて、合併の話が頓挫してしまうことを極力避けたかったわけです。

それで、住民投票で皆様に民意を問うと、そういったことで尾西市の運命を決めていきたいという形で、今、尾西市は住民投票ということをしていただいておりますが、一宮市、木曽川町におかれては首長が代わったということもございませんし、いろいろな意味で、立場、立場のやり方があると思います。尾西市は、そういった形で、ちょっとほかの1市1町とは違う方針を出させていただいているということだけ、ご了解いただきたいと思います。

それで、あと合併についての思いということではありますが、稲沢先生の話とかなりダブるところもあるかと思いますが、私自身の合併の思いを、住民の皆さんに対する説明会などで話させていただいております。

そういったお話を、少しこの場をお借りしてお話ししたいと思うわけですが、先ほどの講演の中にもありましたように、昭和、戦後50年間かかって5,000万人人口が増えてきた。そして、これから50年間かかって5,000万人以上の方が減るだろうと、そういったお話があります。ということは、今までは2年間に200万人ずつ増えてきたということは、2年間に名古屋市が1個ずつ誕生してきたわけです。これは、道路もどんどんつくって、建物もどんどんつくって、景気が悪くなれば公共投資をして、それが人口の増加にすべて政策を後押ししていた状態が50年間続けられてきたわけですね。

ところが、この先、同じようなことをやっていたら、もうどういうことになるか、それは目に見えているわけでありまして、小泉さんが道路を今までのようにやらないと言ってみえるのも、いい悪いは置いておいて、これも突然突発的に言っているわけではなくて、今までのような開発行為で国を維持することはできないという一つの表れではないかと思うわけです。

そういった中で、今の地方交付税制度、これは、先ほど講演でもありましたけれども、どういう状況に陥っているかというのと、今、地方が不足している分を国が補うという形で、全体で18兆円の地方交付税が地方に今配られているわけです。それでも足りないから、あと8兆円は各地方が借金しなさいと、そのかわり後で何とかしましょうということで、全部で26兆円は、実は地方全体に配られているわけです。

ところが、その中の自主財源というか、国がきちんとした財源を持ってやっているのは11兆円でありまして、残りの15兆円は、すべて借金をしながら毎年毎年配り続けている。



どう考えてもこの先、永遠に続くわけではない。これはすべて私たちの子供や孫にのしかかってくる借金になるわけです。これを変えていかなければいけないというのが、一つの財政再建の流れであるわけでありまして、この合併の話、先ほどの講演にもありましたように、地方分権と財政再建という、2つの意義があるということでもあります。財政再建については今のよう形であります。

地方分権、これはどういうことかといいますと、簡単に申しますと、今まで仕送りを受けて生活していた大学生がひとり立ちをするというような形ではないかと思うのです。今までは、足りなくなったら親に「頼むからお金を送ってくれ」と言えばいいのです。そのかわり親が、これをしてはいけない、これはやってはいけないということを「はい、わかりました」と、親の言うとおりにやっていけばよかったというのが今までの制度ではなかったでしょうか。これから、とにかく自分のやりたいようにできる。やりたいようにできるのだけれども、そのためのお金は自分で稼がなければいけないというのがこれからの地方分権なのです。

これで何が必要かという、まず一つは、病気になってしまったときに、もう稼ぐことができない、そういったときに、そのまま潰れてしまっはいけないわけです。また、何か失敗したときに、ちょっとした失敗でも、それでもう大きな借金をして、どうしようもなくなってしまう、それでもいけないわけです。そういったひとり立ちをするための一つのしっかりした体力が必要だということなのです。これが、いわば地方分権でいう各自治体の財政力の基盤の充実ということになるわけです。

そして、もう一つは、今まで親の言うなりにやるしかなかったということ、裏を返せば、言うとおりにやっていけば、何の責任も問われなかったし、失敗すれば親が責任とってくれた。これが今のシステムなのです。ところが、これからは自分の責任のもとで政策が進められる、何でも好きなようにできるのですけれども、責任も自分でとらなければいけない、そのためには、しっかりした考えを持った職員が必要だと。先ほどのお話にもありましたように、職員の専門化ということが必要になってくるわけなのです。

そして、もう一つは、せっかく体力もあって能力もあるのに、働いた以上はしっかりと効率よく働いていかなければいけない、この効率化、これも一つの求められるものとして、それで財政力や体力があっても、やったことが全然生きてこないようでは意味が余りないわけなのです。このためにも、市町村合併というのは、効率化を図るためにも大きなプラスになるものだ。この3つのことを推進するために市町村合併というのは非常に有効な手だてであるというのが地方分権の考え方であるわけです。

そして、こういう意味では、この地方分権とその財政力、国の財政再建ということがこの合併の理由ということでもありますけれども、実は、この地方においては、私はそれ以上にもっと大きな市民の、住民の熱意があるのではないと思うわけです。この愛知県の中でも、この地方というのは、以前は繊維産業が盛んで非常に栄えていた地域であります。ところが、今非常に低迷しております。そういった中で、何とかこの地域を活性化したい、もう一度勢いのある地域にしたい、そういった強い願いが皆さんにあるのではないでしょ

うか。

そういった中で、この合併を機に、先ほど合併の特例債というお話がありましたけれども、この特例債も、本来は合併のデメリットと言われるものを打ち消すために出されている政府の案であるのですけれども、これを利用して、今以上にこの地域を盛んにできないか、活性化できないか、そういった強い願いがあるというのが、この地域の特別な特性ではないかと自分は感じております。

結局、私たちというのは、例えば、今ほかの県の合併なんかを見ておきますと、初めに合併ありきじゃないか、そういった話の中で、いろんな反対論とかが多く起こっているわけでありまして。例えば、実は昨日、谷さんとも一緒に行ってきた全国都市問題会議、高山市に行ってみましたが、ここは合併をすると東京都より大きな広さの一つの市になるというわけです。それで、人口はそんなこともない、そういったのは、どちらかというと、何か本当に合併をしなくてはいけないから合併をするんじゃないかと、そういった思いが強いような気がするわけでありましてけれども。

この私たちの2市1町というのは、合併をしなければいけないからする合併という意味合いよりも、私たちは、同じ駅で乗り降りして、同じ店でお買い物をして、そして同じ会社に通っている、本当に同じ生活をしている市民だと思えるのです。そういった中で、この合併を機に、この新しい新市を、東海地方でも代表的な伸び行く新しいまちだということアピールしながら大きな市に育てていきたい、それが私の一番の願いであり、この合併にかける思いであるわけでありまして。

ちょっと話が途切れましたが、時間になりましたので、これで終わらせていただきます。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。今、丹羽市長さんからは、まず住民投票を2市1町の中で唯一行う、その理由についてご説明があった後で、私の先ほどの講演の中で、なかなか触れられなかった、その地域外への合併、それは皆さん住民の方々、もう一度あの繁栄をというこの熱意と、それと住民の皆さんご自身が感じておられる、地域としての一体性、同じ駅で乗り降りし、同じ店で買い物をしてという、その地域の一体性がある上に、合併ありきの議論ではなくて、合併を進めていくことのメリット、デメリットを確認しながら、よりよい地域を皆さんの中でつくっていきましょうというご意思を説明していただきました。どうもありがとうございました。

次に、こちら、ご当地、木曾川町長、山口さん、お願いいたします。

山口 昭雄合併協議会副会長

3人目ともなりますと、同じことを言わないようにするというのも大変難しいんですが、私なりに合併についてお話をさせていただきます。

私が町長に就任したのは平成6年になります。この年がどんな年であったかというのと、この前の年の平成5年に、国会において分権改革決議というものがなされました。また、平成7年になりますと、地方分権推進委員会というものが設立をされまして、これが

動きを開始すると。諸井虔委員長のもとに5回にわたる答申を行いまして、それがその後、地方分権推進計画の閣議決定、あるいは地方分権一括法という一つの成果を生み出していくわけですが、私は、そういう地方分権時代の曙というときに町長になったというふうに自分で認識をしております。

私ごとですが、私は司馬遼太郎さんのファンでありまして、とりわけ「この国のかたち」という著書に大変引かれておりまして、これを読んでおりまして、司馬遼さんと諸井虔さんが、私の頭の中でイメージがダブってきまして、私は、これからの国の形づくりというのは地方分権なのだというふうに自然に思うようになってきたわけです。

会場の皆さんにちょっと余り関係のないようなことを申し上げておりますが、これから関係があることを言うわけでありまして、私は、そういうふうにして一自治体の長に就任したわけですが、そこで考えましたところの一番の核心といいますのは、その新しい国の形づくりにおいて、一番の基礎になっていく市町村が、やはり先ほどの稲沢先生のお話のように力をつけなければいけない。市町村がとにかく力を持つということが大切なのだというふうに主張するようになりました。

それを突き詰めていきますと、先ほど来出ておりますように、合併もまた一つの選択肢であるというふうに考えざるを得ないわけでありまして。ただし、本当に地方の時代の主役を担っていくというような力ある市町村になるためには、合併によって、ただ大きくなればいいというわけではないということは、皆様方もすぐにおわかりになることかと思えます。

要は、経済力でありますとか組織力、これは人口をバックにしているわけですが、こういった力に加えて、やっぱりこれからの市町というのは、市町の格といいますか、グレードを上げていかなければいけない。さらに、今ブランドの時代でありますので、地域ブランドというものを持っていかなければいけない。住民の皆さんが自信と誇りを持って、全国に、世界に発信していけるようなブランド発信力というようなものを身につけていかなければならないということで、合併にはさまざまな問題が生じてくるというふうに思っております。さらに、せっかくみんなで新しい都市をつくるわけですから、その都市において、みんなが喜んで生き生きと暮らしていけるような温かいまちづくりをやっていかなければいけない、そんなふうに思います。

だから、私は合併に対して注文がいっぱいありまして、こういうことを協議会でくどくど言いますので、最近どうも煙たがられているようなところがあるわけですが、今日はもうちょっとすっきりとお話をしたいと思えます。

先ほど来、お話に出ておりますが、地方分権というのは、突き詰めれば国民が主人公になって国をつくっていくということではないか、そういう形に近づいていくということではないかと私は思います。よく政府、国が国民というふうに言ってくれますと、我々自身は、「それって、俺のことか」というふうに、ちょっときよとんとせざるを得ないようなところもあるわけでありまして、そうではなくて、こういう地域で人々と直接に触れ合っている地方が、国にかわってどんどん権限を持っていく、そして、そういった仕組みをつ

くっていくということは、市あるいは町の中においても同じことが言えるのではないかなというふうに私はいつも考えています。

住民の皆さんの一番身近なところで自分たちで物事を進めていく、自分たちでまちをつくっていくというような意識が育つようなまちの仕組みというものを考えていかなければならないというふうに私は思います。このことを地域内分権とか自治体内自治というような言葉で言うわけではありますが、そういうことを言っていますと一向にすっきりしませんので、こんな言葉を使わずに、今日は違った角度からそれを考えてみたいと思います。

合併をする、合併してまちを大きくするということが、地方の力をつける大変有効なことであると考えて、我々は今一所懸命、合併してよかったとみんなが喜べるような合併、つまり合併の成功例ですね、これを目指して、今協議を行っているわけではありますが、一方、先ほど来出ておりますように、まちが大きくなるということは、それなりにやっぱり不安を伴ってくるものでありまして、例えば、役所が立派になりますと、さっき言いました、それぞれの地域で一所懸命、自分たちのまちは自分たちでつくっていくんだという思いを抱いていた住民が、これだけ立派な市役所ができたんだから、まあ、そちらに任せればいいんじゃないかというので、主体性も自分から放棄してしまうということが起こりかねないというふうにも思えます。こういう私の不安がもし当たると、この合併は失敗に終わると思います。

そうならないためにはどうしたらいいのか。私は、やっぱり地域の特性、個性というものをお互いに尊重し合えるような合併を進めるべきだというふうに思います。このことを強調したいわけではありますが、そのためには、まず一宮市、尾西市、木曽川町がこれまで培ってきたことをお互いに尊重し合って、まちづくりを進めていく。だから、私は自分なりに新しい都市というものをイメージしながら、この濃尾平野のど真ん中に夢を描いてきたわけではありますが、どうもここに来て行き詰まっております。

それはなぜかと言いますと、この3つのまちの規模が余りにも違い過ぎるという一つの壁があるわけです。例えば、さすが一宮と申しますか、大変優れた点がたくさんあって、一つの事業を一宮市が非常にすぐれているというので、これに全体が倣っていこうというときには、経費も恐らく2割、3割増えるだけで済むというので実現がしやすい。ところが、木曽川町に捨てがたい非常にいいものがあるというときに、それを全体化しようと思えば、経費は10倍以上考えなければいけないというので、なかなかこれが継続していけないという傾向が今、3つのまちの事務事業のすり合わせの中で若干出てきているように思うわけであります。

こういうことが繰り返されていって、こういう傾向がどんどん進んでいきますと、やっぱり合併という大変革というものが余り生じなくなると、意味のない合併に終わるというような不安があるのです。確かに、木曽川町は、面積、人口で申しましても、新しい市域を考えると、ほんの一角を占めるにすぎないというような程度でありますけれども、その一角に、もし、いいものがあつたら、それで全体を染めていくということがそんなに難しければ、とりあえずその一角に、それをそのまま置いておいたらどうだろうと。そうする

と、それが繁殖をして、全体を染め上げていくというようなことになるかもしれない。

もし、それがいわゆる毒まんじゅうのようなものであれば、それは捨てればいいわけがありますので、そういう方法も考えて、この今の私の頭の中の行き詰まりを何とか打開していきたいと思います。そうしませんと、このグループのうたい文句でもございます「対等の精神」というものが無意味になってきます。形だけの言葉になってまいりますので、私はそういうことを強調して、これからもやっていきたいと思います。

ぼちぼちそういうことから、私の最初、ごあいさつで、合併問題、これからが山だというふうに申し上げたことの意味がわかっていただけたと思います。これから具体的にさまざまな分野でメリット、デメリットが示されてきます。例えば、保育料はどうなる、国保はどうなる、水道料金はどうなるのかということが皆さんの前に提示されるようになります。そういうときに、例えば、大変自分のところのことを申し上げて、申しわけありませんが、少人数学級であるとか、木曽川流の少子高齢化福祉対策だとか、そういうものが、今言ったような理由で風前の灯火になっていくということになれば、これは皆さん方の中でも大問題になるんじゃないかと思います。

そうなってしまうと、合併に向けての意欲が薄れてくると。そうなれば、これまでの努力が水の泡になるということになりますので、私はこの合併協議会は、これからそういった住民の皆さんの反応をがっちり受けとめて、それに対してちゃんとした結論を出していくという責任を遂行していかなければいけないというふうに思っています。

これまで、やっぱり大一宮市でありますので、これへの吸収というような不安が大変強くて、私は強がりとかかわがまを随分言ってきました。ありがたいことに、一宮、尾西両市長さん横綱相撲でこれに応えていただきましたので、何とか協議が継続をされているわけではありますが、まだまだ私は皆さんの要望を肩に担っておりまして、これをぶつけていかなければなりませんので、もし強がりとかかわがまが通用しないと、いよいよ泣き喋りでいかなきゃいかんかなというふうに思っております。

いずれにしても、本当に新しい都市の隅から隅まで皆さんが喜んでいただけるような合併を目指して、この地方の時代の勝ち組として、この地域が生き残っていけるように、我々は最後まで責任を果たしていきたいと思っていますので、皆さん、そういう意味で、今日は最後まで議論にみずから参加をするという姿勢で、これからお願いをしたいと思います。ありがとうございました。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。山口町長さんからは、まさにこれから合併の協議が始まる、あるいはもう渦中にある、そのご苦労、さまざま言っていただきました。その中で、地域ブランド、対等の精神、そして最後に、地方の時代の勝ち組になると、こういうキーワードを提示していただきました。どうもありがとうございました。

それでは、4番バッターなんですけども、合併協議会の委員でございます杉本さんをお願いいたします。

杉本 尚美合併協議会委員

皆さんこんにちは。4番バッターの杉本です。私は木曾川町の内割田に住んでいます。ここから非常に近いところなのですが、合併協議会では、木曾川町の委員として議論に参加させていただいています。木曾川町の住民としての立場です。

私は、木曾川町に住んで3年になりますが、木曾川町というまちに住むことになりましたのは、今日も来ておりますが、夫が名古屋に通勤しておりますので、それに便利であることと、それから、私が、橋を超えた隣の岐阜県羽島市出身で、そちらの方に実家がありますので、そこになるべく近いところということで、木曾川町を選んで、ここに住んで3年になるということです。

3年住んでみて思うことは、正直住んでみて非常に住みやすい環境だな、まちだなということを実感しています。道路をとっても、鉄道をとりましても交通の便が非常によいところですし、私には2歳になる子供がおりますけれども、今育児奮闘中で文句ばかりの毎日なのですが、育児に携わる中で、子供の育てやすい環境が整っているのが木曾川町ではないかということを思います。

また、皆さんご存じだと思いますけれども、福祉、保健が充実しているということから、このことを理由に、わざわざ木曾川町へ引っ越されてこられる方がいらっしゃるということは何度か耳にします。ですから、今の生活に私自身大きな不安というものはありませんので、ここで積極的に合併する理由というものは、個人的には私自身、見つかりません。

ただ、木曾川町という自治体、自分がお世話になっている自治体ですね、これを考えた場合、稲沢先生のお話にもありましたけれども、国の財政的な行き詰まりや、そして、地方分権という大きな流れの中で、近い将来子供が減り、そして高齢者がたくさんになるという少子高齢化社会を迎えるということを見ると、この木曾川町というまちで健全な行政、行財政を行っていくことが非常に心もとないような気がします。

こういう状況を捉えると、生活圏をとにもするお隣の一宮、そして尾西とともに合併していくことが望ましいのではないかなということを私自身考えています。そして、合併することが望ましいということであれば、一住民としてよりよい合併を願っていますし、また、よりよい合併を目指して、合併協議会の一委員として、一つ一つの委員会に臨んでいるつもりです。

そして、合併によって新しく誕生するまちというのがあるわけですが、これがバラ色というわけでは決してないと思います。3つの市町それぞれが、財政的にも順風満帆で前途洋々の状態ならば、一つになったとしても、ここで合併を考えるにしても、何も心配することはなく、もう行政にお任せすればいいのではないかなということを住民としても思いますが、実際、一宮、尾西、木曾川町を見た場合、決してそういう状況であると言い切れるでしょうか。どのまちも少子高齢化を控えていまして、財政的には決して潤沢、お金持ちであるということとは言えないのではないかなということを思います。

そうした3つの市町が一緒になって単純にくっつく、単純に大きくなるということではなく、新しいまちをここで誕生させていこうじゃないかというのが、この3市町の合併を考えていく一番の基本になるのではないかなということを私は思っています。

三人寄れば文殊の知恵ということわざがありますね、このことわざのように、3つの市町の住民が知恵を絞って、そして、限られた財政の中でいかにして、ここがポイントだと思うのですけれども、賢明な行政を行っていくかがポイントになると思います。そして、賢明な行政を行っていく上で方向性を決めていくのが、新市へ移行していくための私たちが臨んでいる合併協議会であり、そして各委員会であり、また、今皆さんがお集まりのシンポジウムであると考えています。

平成17年3月を目標に、合併の議論と、そしてさまざまな作業を進めるということで、時間的には本当に厳しい状況です。その中で、いろんな分野に分かれて小委員会が設置され、スケジュールが組まれて、時間内にできるように活発な議論がその中で交わされているという状況です。そして、各市町がこれまで行ってきた一つの事業を表にしまして、表にしたものは事務局がつくってくださるのですが、それについて比較しながら検討し、一つにまとめていくという作業があります。それで、これは本当に時間的にも、労力的にも本当に大きなエネルギーの要ることだと私自身実感しています。

それで、非常にこの一つ一つのものを比較検討していくというのは、淡々とした作業なんじゃないかなということをお皆さん思われるでしょう、非常に淡々とした作業です。その中で、一つ私自身、一人の住民の代表として出席する中で大事だと思っていることがあります。それは、新しく誕生するまちに、私たち住民が一体何を期待してきたのか。そして、福祉厚生とか、教育とか、建設とかのいろんな分野がありますが、その各分野で何に重点を置いていこうとしているのか、これについて深く議論をして、掘り下げて、みんなで話し合っ、そして何が大事なのか、何を期待したいのかという、そういったことを常に念頭に置いて、個々の作業を、淡々とした作業を進めていくことが必要なのではないかなということをお思います。

それで、今までお話のあったことと重なりますけれども、その新市のあり方とか、その方向性を考えていく上で、一つ大きな参考となるのが、今まで3つの市町がそれぞれ各分野で取り組んできた具体的な施策であり、その中身だと思うのですね。どの市町にも重点を置いて取り組んできた、そのまち独自のすばらしい特徴や、住民として誇るべきことがあると思うのです。

皆さん、今ちょっと考えてみてください。木曽川町の方が多いかと思いますが、木曽川町に住んでみてよかったなと思われること、きっとあると思います。それをそのまま新市においても残していこうというのは非常に困難なことだと思いますけれども、それを切り捨ててしまうというやり方じゃなくて、それを生かしていく余地を残して、そして、すばらしいその施策を参考にしつつ、その新市の中で、それを応用できないものなのかなということをお模索することが必要なんじゃないかということをお思います。

そして、もう一つ最後に、この地域に住む一住民として、合併について思うことを紹介させてください。合併するなら税負担はなるべく軽く、そしてサービスは手厚く、多くというのが私の住民としての単純な本音です。大抵の方は、合併に向けてこのフレーズに尽きるのではないかなと思います。皆さん、どうでしょうか。

とは言っても、人口規模の異なる2市1町のそのさまざまな事業のすり合わせ、淡々とした作業ですね、これを進めていく中で、例えば水道料金とか保育料といった、個別に見ていくと、今までの生活とは違って負担が大きくなるものや、あるいはサービス水準が低下してしまうのも必ず生じてくると思います。しかし、その個別の事柄を目先の損得でとらえるのではなくて、もっと大きな視点で、大局的な視点で合併について考えていくのがいいのではないのかなということ私なりに考えています。

また、地方分権の大きな流れがありますが、これもお話の中に何度か出てきましたけれども、国からの財政的な支援が減って、そして自治体に対して納めた税の分のサービスしを受けられない、そういう厳しい時代がきっと近い将来やってくるのではないのかなということ私自身も感じています。一言で言ってしまうえば、受益者負担という原則が厳格になってくるということです。その中で、住民は自分たちの納めたお金がまちのどんなことに使われて、そして、自分たちの生活にはどういう影響があるのかということ初めとして、皆さん、行政に大きな関心を払わざるを得ない、そういった状況になってくるのではないかなということも思っています。

ならば、政策の決定過程に住民の声を反映させていく必要も出てくるでしょう。そして、その住民の声をもとにした行政ができるというのは、住民にとっても、そして行政にかかわる方々にとっても、とても理想的なことだと思いますし、そのことが、私が一番最初に申し上げた、限られた財政の中で賢明な行政を行っていくということにつながるのではないかなということも考えています。

私たち住民は、自治体のその主体であるという自覚に本格的に目覚めて、そして、積極的に住民自治に参画していく時期というものは、そんなに遠い先の話ではないような気がします。そういう意味で、合併について議論していく中で、その小さな単位での地域内の自治のあり方とか、その自治の仕組みといったもの、そして、その方向性をきちんと考えていく、私たち住民が考えていく必要があるのではないかなということも思っています。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。杉本様からは、こちら、木曾川町の住民として、その住みやすさを皆さんと共有しながら、健全な財政、賢明な行政をしていくためには何が必要なのだろうか、そういった問題提起と、意識、またそういったものをご説明いただきました。ありがとうございました。

一巡しましたところで、それでは、また今度は話題を変えまして、今合併協議会の中で、こちら登壇されていらっしゃる4人の方々、さまざま新市のあり方、話し合われているところだと思います。どのような新市にしていこうか、その重点的な項目は何なのだろうか、そういった点を、もう一度、同じ順序ですけども、一宮、谷市長さんからお願いいたします。

谷 一夫合併協議会会長

それじゃ、手元に水色の資料が入っておりますので、ちょっとそれをご覧いただきながら、この説明をさせていただき、本題に移らせていただきたいと思います。



今の合併協議会、35名のメンバーであります。その中で、小委員会を5つ持っておりまして、4つの小委員会が各市町3名ずつ、合計9名の委員さんで構成されておりますが、新市建設計画作成等小委員会というのは、市長、町長も参加をしております、そのほかに2人の専門的な委員さんも入っていただいて、それで14名で構成されております。この新市建設計画作成等小委員会、そこで合併の方式でありますとか、新しいまちの名前でありますとか、あるいはどんなまちづくりをするかという新市建設計画、これについて議論をしております、数回の会議の中で、概ね概要が固まってまいりましたので、この機会にご説明をしたいと思っております。

あけていただきますと、新市将来像の体系図の一番初めに基本理念ということで、3つのキーワードが書かれております。住民の皆さんが、この地域で暮らしていく上で最も大切なこと、これはもうやはり安心ということですね。安心して暮らせる、いろんな意味で安心して暮らせるということは大事なことでございます。

それから、また、今この地域に最も欠けているもの、それはやっぱり元気じゃないかと私も思うわけでありまして、元気を出して今の状況を乗り切り、そして将来に向けて頑張っていかなければいけません。

そして、また今、杉本さんからもいろいろお話がありましたが、これからのまちづくりの中で、行政と住民の皆さんが力を合わせて、お互いに知恵を出し合い、力を出し合ってまちづくりをしていく協働ということですね。この安心・元気・協働という3つのキーワードを基本理念として掲げております。

そしてまた、将来像であります、これは、私どもの各市町がそれぞれに総合計画というものをつくりまして、その中で、それぞれのまちの将来像を掲げております。若干それぞれニュアンスが違うわけではありますが、どこの総合計画の将来像にも「心」という言葉が入っております、やはりこの20世紀の物質中心の世紀から、21世紀は心の世紀に向かっていくと、こういう視点についてはどうも一致をしているようでありまして、なおかつ、そこに2市1町のこの地域の本当に母であり、我々のかけがえのない財産であります、この木曽川という、そのイメージを取り込んで、将来像としては「木曽の清流に映え、心ふれあう躍動都市」と、「」というのは新しい市の名前が入ると思うんですが、これは皆さんに公募をしておりますので、ぜひその公募にこたえていただきたいというふうに思っております。こういった将来像を掲げようと、こういうことでございます。

それから、基本方針として、7つの礎ということで書いてあります。一番上が、保健・医療と福祉の充実、今いろいろとお話があった中にも出ておりました。やはり一つのキーワードは少子高齢化ということではありますが、安心して生涯を通して生き生きと暮らせるまちづくりを目指して、こういった施策を行っていききたいと。

右側に事業例が幾つか書いてございます。この事業例は例えばということでありまして、まだ決定事項ではありません。これから小委員会等を通じて、それぞれ調整をし、議論をした上で、事業例を含め、これが、この新市建設計画の中に記載をされてまいりますので、まだ決定ではございませんので、ご理解いただきたいと思っております。

それから、2番目には、生活環境の整備ということで載せておりますが、木曽川を中心とした環境を守っていこうと、そして、それを何とかまちづくりに生かしていこうと、こういうことでございます。今の木曽川と接します長さ、一宮市が8.9キロ、木曽川町が3.4キロ、尾西市が6.4キロでございます。全部合わせますと18.7キロということになるわけで、大変長大な長さを新しいまちの北側から西側にかけて木曽川が流れると、こういう地域になるわけでございます。この木曽川の恵みを最大限に生かしたまちづくりをしていきたいと、こういうことでもあります。

それから、産業の振興ということ、先ほどから議論が出ているとおりでございます、繊維を初めとした既存産業の高度化、あるいは新規産業の創出、あるいはブランド力の強化と、こういったことをやっていきたいということでございます。

その次は、教育・文化の振興ということでございまして、先ほどから35人学級のお話も出ておりましたけれども、ここに書いていますとおり、教育、あるいは文化を通してのまちづくり、こういったことに力を注いでいきたいと考えております。

その次には、都市基盤の整備ということでございます。JRと私鉄と2本の鉄道が走り、そしてまた高速道路が東西南北に走るという、大変交通に恵まれた地域でありまして、こういった交通の利便性を生かしたまちづくり、こういったものも必要ではないかというふうに思っております。2市1町合併いたしますと、2市1町の中にありますJRと名鉄の駅、19あるのです。私も知りませんでした、数えてみてびっくりしましたけど、19の駅があるのです。こんなまちはあまりないのではないかという気がいたしますが、こういった利点を生かしたまちづくりが一つのポイントかなと思っております。

それから、下から2つ目でありますけれども、住民参加・コミュニティの推進、つまり、このコミュニティというのが、極めてこれから大切になってくるだろうということでございまして、杉本さんからもお話がありました。市民の皆様の自発的な意欲、努力によって、自分のコミュニティは自分たちでつくるのだと、そして、それをまた全体へと反映していこうと、そういった市民と行政がともに力を合わせたまちづくりが、大事になるだろうというふうに思います。

そして最後に、行財政基盤の強化ということで、分権時代に生きる自立したまちづくりということで、先ほども申し上げました中核市を目指して行政能力を高め、財政基盤を強化して努力をしていきたいと、そういうふうに思っております。やはり身近な行政は、身近な自治体がよくわかるわけでありまして、皆さん方のご要望を直接肌感じて受けることができるわけですが、そんな中で、効率的で有効な行政が行えるような、そういった仕組みづくりをしていきたいと、こんなふうに思っております。

こんなような基本的な考えに基づいて、これから具体的な事業について、またこの委員会の中でいろいろと議論をしていくことになるかというふうに思っております。

時間もちょっと終わっておりますし、この場では5分と定められておりますので、また後ほど時間があれば追加をさせていただきます。

稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございます。

それでは、引き続き、尾西市長の丹羽様、お願いいたします。

丹羽 厚詞合併協議会副会長

今、一宮市長の谷さんには、新市建設計画の概要についてご説明していただいたわけがありますけれども、自分としては、まずイメージとして、このまちづくり、これからどうしていくかということを考えていきたいということをお話ししたいと思うのですが、先ほども申しておりますように、これからの日本の人口というのは減り続けるわけなんです。

それで、50年後には、ちょうど第二次大戦が終わった直後の8,000万ぐらいになるのではないかと。この50年間で5,000万ふえてきたのが、また50年間で5,000万減るということでありますので、土地の使い方、あるいはまちづくりも、これも今までと同様なことをやっていたら、必ずや失敗に終わってしまうということなのですね。ですから、これからは人が減っていくことを考えていかなければいけない。

そのためにはどうするか。まず、新しい新市としての顔はこれはもちろん今のJRの一宮駅になるかとは思いますが、あそこに新市としての顔、そして、ほかの地域から集まってくるような、求心力を持った、そういったエリアをつくっていかねばならないのではないかと。そして、またこの木曽川町、あるいは先ほど言ったいろいろな駅、これは私たち、住む人たちが身近に使う駅として、こちらの開発も当然必要なことではあります。

そして、あともう一つ重要なものが、その周辺の地域、私たち尾西市、あるいは木曽川町、あるいは一宮市の周辺の地域、こういったところが、下手をしたらどんどん人口が減っていってしまう可能性もあるわけです。ですから、幾ら開発しても、それが有効に回るとは言い切れないわけなのですね。その中でも、住宅としてのよさを前面に出して、大きな施設を1個ど真ん中につくるのではなくて、いろいろなところに身近に、小さな施設でいいから、お年寄りの施設、あるいは子供の施設、そういったものを充実していく、こういったことが特にこれからは必要になるのではないのでしょうか。

そして、もう一つは、産業と住宅のバランス、これも考えていかなければいけない。住宅都市として生きるか、そして、ほかの地区から越してきてもらうことばかりを考えていても、これはそのとき、そのときはいいいわけですがけれども、それから30年後、40年後を考えると、そのとき越してきた人は超高齢化になってしまっていて、次の世代が育たないようなことになってくるかもしれない。ですから、住宅としてのエリア、あるいは工業を誘致するようなエリア、そういったものを大事にしながら、中心地区は、この地方を代表する都市としての、そういった顔づくりをしていってほしい、そういったことを考えているわけなのです。

それで、一番大事なことというのは、私たち、もちろん私も尾西市民でありまして、木曽川町長さんは木曽川町民であります。こういった地域の特性、よさを生かしていく、これはもちろん使命でありますし、大事なことであるということはもちろんそうなんですけれども、ただ、最終的に一つの市になるんだ、例えば、子供、孫の代になって、その子た

ちが考えているのは、私たちは旧尾西市民だ、旧木曾川町民だということではなくて、新しい何々市民なんだということになるわけです。そういったことを考えたまちづくりというのをやっぱりしていく必要がある。

その中で、ただ、今までの、例えば昭和の大合併を超えて、私たち尾西市も一宮市もいろんな町が集まって市になっているわけなのですが、そういったところで行われてきた祭りですとか商店街というのは、しっかりとまだ根づいているわけなのです。こういった伝統のものというのは、いくら市が大きくなろうが、合併をしようが、これは守られていくものと思います。これは守っていかねばならないものだと思っております。ただ、制度、社会制度ですとか、そういったものは、最終的には一つになっていくのではないかなと、そういう気はしております。

そのまちづくりの状況を見ますと、例えば、今の一宮市でいいますと、中心は駅前ということで、木曾川町であれば木曾川の駅前ということで、はっきりした中心があるわけですが、我が尾西市には、実はほかから来た人によく言われるのは、「まちの中心はどこですか」と言われる。それは駅のない市でありまして、バスだけの交通機関の市であるから、駅は、開明駅ですとか玉野駅ですとか、あるわけなのですが、本当のぎりぎりの境にあるもので、中心の方には何も駅がないというところでお話ししているのですが、そういったところで、どういうお話をしてきたかという、心の中心はあるのです。

心の中心というのは、お祭りに全員が集まってくるところは市役所周辺だ、そうすると、心の中心はあるのですけども、施設というのは満遍なく、どこかに集めるのではなくて、いろいろなところに住民が使えるように点在しているのがうちの市なのですけれども、これからは、やはり住宅エリアといいますか、周辺部分というのは、そういった開発のされ方がある、されていくのかなと、そういうふうに思うわけがあります。

以上です。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

では、引き続き、木曾川町長の山口さん、お願いいたします。

山口 昭雄合併協議会副会長

私は、まちづくりの姿勢ということをちょっと考えてみたいと思います。先ほど地方の時代の勝ち組というふうに言いましたが、地方の自主自立を促すこの地方分権の流れというのは、恐らくこれから都市間の競争というものを生み出してくるというふうに思っております。それが、いい意味で国の活性化になるというふうにも考えられるわけですが、要は地域が力と個性をぶつかり合って、その結果、勝つところもあれば負けるところもあるということです。だから、私は、この地域をどういうまちにすれば勝ち残れるのかということを考えて、まちづくりをやっていかなければいけないというふうに思います。

だから、私は、鳥のようなといいますか、ヘリコプターのような位置からこの地域を常に眺めながら、当然、もう一つ高みからこの愛知県下、あるいは日本の国の中で、一体この地域がどんな位置づけにあるのかということを見ながら、まちづくりを考えていく必

要があると思っております。そういうことで、鳥のような高みに立って、あるときには歴史の目、文化の目で眺めていく、あるときには、経済、産業の目で眺めていく、あるときは、暮らしの目で眺めるというようなことをしながら、この大きなエリアのどこをどのように活かしていけるのか、どこに何を配置していったらいいのかということ、だんだんと定めていくということが必要なのではないかなと思います。

いってみれば、パズルのような作業になるかもしれませんが、この作業の中で、やっぱり一番重要なのは、旧市町、3つの地域に限らず、大きな一宮の場合には、その中の地域にもう一度光を当て直して、その特性というものをよく踏まえて、さっき言いました配置、組み合わせというようなことをやっていくべきかなと思っております。どの地域も、もちろん住民が納得できるようなものをやらなければいけませんので、高いところからと申し上げましたが、やっぱりちゃんとその地に根差した考え方の上にそういう作業を行っていく必要があるかというふうに思います。

さっきは、特に木曽川町の地域にこだわるようなことを言っておりまして、こういう壮大な話を聞きますと矛盾があるのではないかというふうに思われるかもしれませんが、私の頭の中ではちっとも矛盾はないわけでありまして、たとえ話をしますと、この地球上の世界というのを大宇宙に例えてみると。そうしますと、この日本というのはいわゆる銀河系宇宙、その中でこの地域、新しくできる都市というのは太陽系と考えてもいいわけでありまして、その中で、一宮の地域が太陽であるとすれば、尾西の地域は土星か木星ですか、それで、木曽川町は地球というような関係で動いていく。木曽川町を地球に例えるところがみそであります。例えばこの木曽川町の地域が、教育、文化の一つの核になっていくということでしたら、地球じゃなくても光り輝く金星と例えてもいいわけでありまして、そうやって、自分の地域にこだわって、自分の地域をひいきしながら、そうやって全体を考えていくということが大切かなというふうに思います。

こんなふうに、新しい太陽系というものを考えていくというような視点で、この新しい都市づくりが進んでいければ、大変みんなが幸せだろうなと思ひまして、新しいまちの核になるものは何かと言ったら、ちょっときざではありますが、それは夢だというふうに言いたいと思っております。

以上です。

稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

それでは、合併協議会委員の杉本さん、よろしく願いいたします。

杉本 尚美 合併協議会委員

将来のまちづくりにおける重要課題ということなのですが、青い紙で先ほど谷市長の方からご説明がありましたが、私はこの中で2つのことに注目というか、重要課題として私自身考えています。

一つは、少子高齢化を迎えるということで、やはりまちづくりの重要課題の一つとして、一番上に掲げられているものなのですけれども、保健・医療・福祉の充実というところが

まず、第一に挙げられるのではないかと受け取っています。新市の保健・福祉について考えた場合なのですが、先ほども申し上げましたが、限られた財政の中で、いかにお金をかけることなくこれを充実させていくかということに知恵を絞っていくのが必要なのではないかと考えています。

少子高齢化社会の、その高齢化というところに焦点を当ててみますと、この地域は、平成22年ごろをピークに人口が減り始めます。そして4人に1人が65歳以上という統計が出ています。その中で、その4人に1人の人、高齢者、今の段階では65歳の方というのはお元気で、まだまだこれからの方だと思うので、高齢者という言い方はしたくないですけども、そういう人たちが4人に1人になる。その1人の人たちが、いかにしてお元気でつらつと生活されるか。そして、生きがいの一つとして、どのような形でこの地域でご活躍されていくかということがポイントになってくると思いますし、例えば、そのために一つ例を挙げますと、合併による行財政の効率化で浮いてくる財源というのがあるはずです。その財源を介護予防的なその保健福祉事業に配分するといった手法も一つの案としてじっくり考えていく必要があるのではないかと考えています。

そして、もう一つ注目したいのが、少子高齢化の少子の方なのですけども、安心して子供を産み、そして育てていく環境を整えていくというのは、もう一つの重要な課題だと思っています。子供を育てるというのは、人としての心を育む、育てていくということだと思っています。家庭や学校だけじゃなく、地域が大いに関わって、みんなでその子供の心を豊かなものに、大事に育てていく、そういった基盤や環境をいかにこの地域に生み出していくか、非常に難しい課題ではありますが、母親の一人として少子というところに焦点を充てた場合、教育についても、あわせて重要課題として新市のまちづくりを行ってほしいなという願いがあります。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

はい、どうもありがとうございました。

あっという間に時間がどんどん過ぎ去っていきました。こういうコーディネータ、私も何度も務めておりますけども、さすがこの合併協議会、皆さん進められている中で、いかに協調性をもって進められるかというのを感じさせるような進行をしていただいております。

そこで、最後なのですけども、もう皆さん方からの質問、できる限りお受けしたいと思いますので、最後に一言だけ締めくくりとして、合併に向けての決意、あるいは、それ以外に何でも結構ですけども、お一言ずつお願いいたします。谷市長さんからお願いいたします。

谷 一夫合併協議会会長

今日はどうもありがとうございました。今の発言を聞いていただいてもわかると思いますが、木曽川町の方の発言時間が一番長いですね。そういう意味合いでも同じでありまして、私どもはしゅんとなっております。ということは話し合いによって進んでいる部分もかなりあるのかなと。決して木曽川町長さんのことを煙たく思っている部分がないとは言

いませんけども、そういうことはございませんで、仲良く議論をしております。仲がいいから好きなことが言えると、こういうことでございまして、ひとつご理解をいただきたいと思えます。

合併成功にかけて必要なことは、やはりまず一つは信頼だと思えます。お互いにまち同士の信頼、そしてまた行政と住民の皆さんとの信頼、これがやはり何よりも重要でありまして、これから一番の基本は、やはり情報公開であると思っております。今回はすべての会合が公開をされておりました、だれでも傍聴をしていただけるわけでありまして、インターネットでも、若干会議録等は作業期間があって少し遅れますけれども、二、三週間もすれば全部お読みをいただけるわけでありまして、すべて公開をさせていただいておりますので、是非ひとつ、そういった意味での情報も収集をしていただきたいと思います。

決して時間が十分あるわけではございませんけれども、一所懸命議論をしていくように努めて、そして、やはりみんなが、今何とか頑張ってやってみようという、そのみんなが納得して、そして合併に向けて進んでいくということがとても大事なことでないかなと。

そのために、やはり昔から言う、その小異を捨てて大同につくということも場合によっては必要でありましょうし、小異を残しながら大同につくということも必要でありましょうし、そういったときには、やはり大同につくという姿勢がないと合併はできないわけでありまして、これ冒頭からずっとお話がありました、これからの時代を乗り切るために必要だという認識を皆さんがよく理解をしていただく、その辺の認識がうまく一致できなければ、この話はできなくなるわけでありまして、ぜひその認識を持っていただけるように、私どもも頑張っていきたいと思えます。

いずれにしても、本当にたかだか3つの市町でありますけれども、木に竹をつくとか、そういう言葉がありますけど、本当にそういう気がいたします。まさに、水と油を一所懸命まとめようと我々はやっているわけでありまして、かき回して、まとまったかなと思っても、しばらくするとまた分かれてくるということもありますけど、なかなか合併は難しいですけれども、しかし、10年、20年、30年経てば、恐らくいつかこれはまとまっていくんじゃないかと、そんなふうには思っております、最初はぎくしゃくしても、何とか軌道に乗せていきたいと、そういうふうには思っているわけでありまして。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

ありがとうございました。

次に、丹羽市長さん、どうでしょうか。

丹羽 厚詞合併協議会副会長

私も思いますのは、先ほどの話でもお話しさせていただきましたように、この合併協議においては、私たち一人一人が各市町の市民、町民であるということとともに、もう一つ考えなければいけないのは、新市の市民になるということ、これをまず大きく考えていかなければいけないのではないかと、こういうことで、私たちのいいところを残す、これは重要なところでありますけれども、新市になったときに、いかにいい市にしていくか、これを念頭において考えていきたい。

これは、最も強く言いたいのは、今の一宮市民の皆さんに対して言いたいわけです。まだまだ一宮市民の皆さんは、まあ変わらないだろうというイメージを持って、私たちは新市に対して非常に期待をしているわけなのです。そういったことでも、やはり一宮市の皆さんにも、その気概を持っていただいて、新しい市になるんだと、こういった2市1町のみんながそういった思いでその合併に取り組むべきではないかと思います。

以上です。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

はい、ありがとうございました。

引き続き、山口町長、お願いします。

山口 昭雄合併協議会副会長

先ほど一宮市長さんがおっしゃったように、合併協議会、特に新市建設計画作成等小委員会の議事録を読んでもらうと、私の発言が一番長いですね。第4回の会議録なんかは、私は見ただけで読んでいません。というのは、恥ずかしくて見られない。というようなくらいに発言してきましたが、これ最初に宣言をしております、一番小さなところが一番元気にやっていかないと、これはもう対等にはいかんのだということで、これまでやってまいりました。

ただ、これからは、さっきも言いましたように泣きしゃべりの段階に入るのかと思いますので、余り言葉数は多くなく、発言を控えながらやっていきたいと思いますが、そういう協議の中で、これからこの合併を成功させるために一番必要とされるものは、私はやっぱり住民参加だと思います。住民の皆さんが自分のまちを自分でつくる、これは最大のチャンスだというふうに考えていただいて、この合併協議に参加をしていただくということです。

そのためには、やっぱり情報開示が大切でありまして、合併協議会を中心とする合併への動きを本当にリアルタイムに、しかも生き生きと我々は伝えていく責任があると思います。ただし、常にテレビで報道しているわけではありませんので、リアルタイムとはまいりませんが、そばで見えておりますと、合併事務局、本当に懸命に情報をどんと外に流す工夫をしておりますので、後は皆さんが、本当に貪欲にそういう情報を自分に取り込むという作業をしていただかないとだめかなというふうに思います。そういうことによって、やっぱり問題を共有して事を進めていく。

そして、やっぱり問題をということの一番の中心には、先ほど丹羽市長さんがおっしゃったように、新しい市建設という、夢を共有していくことだと思います。そんなことで、夢を真ん中に置いて、みんなで一所懸命やっていけば、一宮市長さんが言われたような、そのうちにちゃんと固まるという結果が得られると確信をしております。

ありがとうございました。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

ありがとうございました。

最後に、杉本さん、お願いします。



杉本 尚美合併協議会委員

私は、新しく今度誕生するだろうまちに、皆さん一人一人、住民一人一人がそのまちに何を期待したいのかということと、各分野でどういうことに重点を置いてやってほしいのかということ、いま一度、皆さんご自身の中で考えていただければなということを思います。それで、私自身、合併協議会の一委員ですので、皆さんの意見を聞く機会があれば、その意見をぜひ伝えていきたいとしますし、私自身もどんなことに重点を置いたらいいのだろうということを常に頭に置きながら、その一つ一つの委員会に全力で参加していきたいなということを思っています。

あと、一つ申し上げたいことは、新市建設計画作成等小委員会の中で、合併の形というものが一つでき上がりつつあります。「対等合併、編入方式」ということで、新聞などで読まれた方もあるかと思いますが、これは小委員会でまとまった形で、まだ決定ではありませんが、今度、協議会に提案されるという段階ですけれども、そこで生まれるのが編入する側と編入される側です。

編入する側は、やはり合併後、自分たちは安泰で何も変わらないという意識を持ったりとか、あるいは、編入される側が、編入ということであれば、これは吸収されてしまうということなのではないかという懐疑的なその視線を向けるのではなく、新しい一つのまちをつくっていく、みんなでつくっていくという前向きな姿勢で、新しいまち、どんなまちにしたいのかという、夢を一度描いてみるのが必要なのではないかとすることを思います。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

はい、ありがとうございました。

最後に、この合併に向けて重要なことということで、4人のパネリストの方々から語っていただきました。

ここで、このパネルディスカッションは一応終了させていただきまして、フロアの皆さんから質問をお受けしたいとしますので、司会の江崎さんの方にマイクを戻したいと思います。よろしくお願いします。

司会

ありがとうございました。

それでは、これより質疑応答ということで、会場の皆様からご意見やご質問を受け付けたいと思います。どうぞ。

よろしいでしょうか。マイクの方をお持ちいたしますので、それからお願いいたします。ただ、発言の際に、どのパネリストの方にご質問なのか、また教えていただきますよう、お願いいたします。

質疑者 A

すみませんが、それでは、稲沢先生と丹羽市長にお尋ねします。

稲沢先生の方の資料の中で、年収418万の人が368万円の借金をして816万円の生活をしていると、これは、身分不相応な身の丈に合わない生活をしているのだろうということを言われておられると思います。

それで、丹羽市長の中から、国の税収が大幅に減少し、交付税そのものも毎年借金をして配分しているというようなご説明等もありましたが、その結果、次の世代への借金のツケを回すようなことになってはいけないというようなご発言もありました。しかし、その後、特例債があるというようなことで、特例債があるのが絶好のチャンスだということもお述べになっておられるわけなのですね。ただし、特例債は、あくまでも借金であるということと言明していただけませんと、何かおいしいおまんじゅうをただでいただけるような気がします。一般の市民の方はそう理解するのが普通であります。

私どもも、先般研修会やったときに、借金である以上は、余りおいしいまんじゅうをいっぱい食べちゃうと、結果は腹が痛くなりますよというようなお話もありました。わかりやすい例え話なんです。そういうことを考えますと、特例債を絶好のチャンスという考え方と、冒頭、国及び地方の財政が非常に緊迫しているというお話と矛盾しておるのではないのでしょうか。そのことを1点お願いしたい。

それで、私はこの合併は、合併を機に借金をするのは、唯一必要なものをどうしても調整してやらなきゃいけないときに限り、一つ的手段として残しておき、自己決定、自己責任の中から行政の合理化を図り、サービスの低下をさせないように努力していくのが、新市への本当の意味の合併だと私は思っております。そのように進んでいきたいものですから、特例債があるのは最大のチャンス、絶好球であるとの認識には、私は疑問を感じます。

もう一点、これは杉本さんに地域住民の代表として1点だけなのですが、尾西市さんは住民投票をされるということですが、地域住民が参加していかなくちゃいけないということをしっかりお述べになっておられるわけなのですが、住民投票についてどう思われますかということだけよろしくお願いします。

司会

ありがとうございました。

丹羽 厚詞合併協議会副会長

先ほどの特例債のことでありますけれども、誤解を解かなければいけないのは、私もあくまでも特例債は合併の目的ではないということです。ただいまの合併、先ほども話が出ましたように、「対等合併、編入方式」という名前で私どもの新市建設計画作成等小委員会では決めさせていただいたのですが、今回のこの特例期限までの合併というのは、合併後のまちづくりをしっかりと、こうやって協議の場で決めておいて、それを合併後きちんと守っていくというのが、今までにない合併の特徴であります。

例えば、昭和の大合併では、もちろん合併後、こうしましょう、ああしましょうと取り組みはしたかもしれない。ところが、合併したら、いや、やはりちょっと財政が苦しくて、これはできませんでしたよという話で、そのままにされてしまっている部分が多いのではないかと。そういったところが、今合併のデメリットとして周辺地区は置いてきぼりになるのではないかと、そういった心配が言われているわけです。

それで、国がこれに対して、このデメリットを解消するために特例債というものを設定した。だから、合併前にきちんとまちづくりも、こういった新市の計画をして、また、す

り合わせでいろいろなことを約束した、その財政的な確約を特例債でしてくださいと、だから、約束は反故になることはありませんよというのがこの特例債であって、決してこの特例債目当てに合併するわけではない。

私が当てにしているというのは、この特例債を当てにしているのではなくて、人の心です。新市になるという、こういった新しいまちをつくるのだという、そういった盛り上がり新市の中でどれだけ生まれていくか、そして、それに使う補助として特例債も利用すべきだということでありまして、決して特例債ありきの話ではないということ。

それから、この毎年毎年積み重なってくる交付税の借金に比べて、特例債というのは、私はそんなに高いものではないと思います。1回きりのものでありますので、例えば、当然住民説明会でご説明いただいていると思うのですが、この新市、2市1町の場合だと約490億の特例債が認められます。そのうちの95%のうちの70%、ちょっとわかりにくいですが、320億ぐらいは後々国が肩がわりをしますよと、その後は返していかななくてはいけない部分があるわけですが、これが1人当たり約、例えば490億のうちの300億、もうちょっとあったかな、350億かそのぐらい、後でひょっとしたら数字を言っていたりもかもしれません。大雑把に見て、人口1人当たり10万円ぐらいは国が払ってくれるお金ではないかという計算のもとに考えますと、例えば1億人全部が合併対象になったとして、10万円ですから10兆円ですね、1回きりなのですよ。

今、交付税で国が借金をし続けているのは、毎年毎年、先ほど言った15兆円なのです。だから、この毎年毎年積み重ねるぐらいだったら、特例債というものを基盤にまちづくりをしてもらう、あるいは合併をしてもらう、そういったことのもとに、交付税制度は見直していきたいということであれば、全くこれは矛盾のない国の政策ではないかと私は思っています。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

尾西市長さんからの答えで、私、そのまま尽きていると思うのですが、絶好球という言葉が皆さんに誤解を与えたかもしれませんが、なぜ絶好球と申し上げたか、このまちがある限り、必ず投資ということは、これは続くはず。投資をする、そして、まちのインフラを整備していく、そのインフラを整備していくときに、今ある借金の条件というのがあります。

この特例債というのは、その借金を返済する条件が非常に有利に機能するようになっていくというものですから、それを活用しない手はないのではないのでしょうかということで、先ほどの質問者の方の論点に戻りまして、借金はむやみやたらにしたら、確かにそれは返済ということで苦しむことになる。ただし、むやみやたらじゃなくて、必要なときに必要なものをつくらなければ、後でつくるときにはもっと大きな住民負担になってくる。だから特例債を活用したらいかがでしょうか、そういう論点です。

以上です。

杉本 尚美合併協議会委員

私に対する質問でお答えしたいと思います、端的に木曾川町における住民投票は私は

必要ないと思っています。それは2つ、私、今から理由を述べたいと思いますが、一つ目は、木曽川町という自治体、この小さな自治体を考えた場合に、話の中でも申し上げましたように、国の財政的な行き詰まりと、そして地方分権という大きな流れの中で、少子高齢化社会を迎えるということを考えて場合、この小さなまちで健全な行財政がこのまま続けられるかどうかということを考えて場合に、非常に無理な話、非常に厳しいだろうなということが大前提として一つ挙げられます。それが事実としてありますので、活路を見出す一つの手段として合併を選ぶということは、私自身、合併が望ましいと考える一つの理由でして、私自身、住民投票は必要ないと考えます。

そして、2点目に申し上げたいのは、木曽川町で8月に住民アンケートを実施されたと思います。その中で、結果を見ますと、8割近い方というのが合併について賛成であるという統計が出ています。こういうことを考えると、私自身は合併についての住民投票というのは必要ないのではないかということを思っています。

司会

どうもありがとうございました。

最初に挙げられた方、よろしいでしょうか。

まず、どのパネリストにご質問がおっしゃっていただきまして、お願いしたいと思いません。

質疑者B

稲沢先生と、あとお答えいただける方がありましたら、ほかにもお願いしたいと思います。一宮で市民活動をしています星野と申します。

お話ししたいことというのは、コミュニティの問題というのを、この合併協議会の中で何か取り扱っていく必要性を考えられないだろうかということでございます。制度的な話、すり合わせの事項に関しては、ある意味、事務的に年内に片づいていくでしょうが、そういうものでははかれない意識的なもの、その奥行きのようなものを確保する手段というのが、この合併に関して必要ではないのか。

そして、谷さんに、これを言うと怒られちゃうかもしれませんが、木曽川や尾西の方々は、このまま一宮に入っていくのでしょうか。本当に皆さんは一宮に来ていいですか。私は一宮の市民として、私たちのまちはコミュニティの確保が余りできていないように思っていますので、すみません、市長。ほかの木曽川や尾西の方々は、逆に厚いコミュニティが僕にはあるように思うのです。

そうしたコミュニティを確保する手段というものが無いままに、一宮に編入されていくのはいいだろうかというような、そうしたものの手段のような、どこかこの合併協議会の中で持てないだろうか。それは、もう一つ大きくいきますと、市民の声をもっと広く普遍的に聞く手段というのを組織としてつくっておく、そういう形で市民性を確保していくしか方法がないだろうかという政策的な問題でもあります。そのことについてお願いいたします。

稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

ありがとうございます。今お話をお聞きして、それは私に対する質問と同時に、恐らくこちらにお並びの合併協議会の皆さんへのご提案ということで力強く受けとめさせていただいて、まさに、今合併協議会の事務というのは、非常に時間の決まった事務でございますので、一つ一つやるべきことをこなしていく、これはかなり大変なことだと思いますが、今おっしゃったような市民の声を、そしてこのコミュニティというものが、果たしてどのようにとらえられるか、そのあたりから、とにかく一つ一つの議論を積み上げていかないと、先ほど、私の講演で申し上げましたように、我々は市として合併したというよりも、コミュニティの合併であったと。

つまり、これは例ですけれども、4つの市町が合併して一つになったのではなくて、19のコミュニティの合併だったということで、19のコミュニティそれぞれが同様な力、同じような力、競争力を持ったの合併を果たしたのだと言い得るような何らかの仕組みを、合併協議会の中で持っていたきたいという提案を、そのまま私入れさせていただいて、一言、谷市長からもお願いいたします。

谷 一夫合併協議会会長

コミュニティというものをどう考えるのかという問題も、やっぱり十分に議論する必要がまずあるだろうというふうに思います。それで、一宮には、この言葉を使うと、木曾川町長さんからいつも怒られるので気が引けるのですが、これはちょっと誤解しないでください。というのは、連区というものがあまして、これは中心部の地区は除きますが、周辺部、周りの連区が、要するに昭和30年、あるいは15年に合併をしたときの旧の町村なのです。葉栗村とか西成、大和町とか、そういうものが今連区という形で残っています。

そこで、いわゆるその地域としての活動がかなり行われていまして、例えば、この敬老会の事業はその固まりでおやりになるとか、あるいは、この間も慰霊祭なんかがありましたけれども、そういったのをそういう地区でおやりになるとか、あるいは、ごみの収集やさまざまなことについて、その地区で住民の皆さんが自発的に取り組んでいただいているような、そういった組織体があるわけですね。

それで、そういうものと違う別のコミュニティですね、要するに、その市民活動的なものをもっと伸びやかに自由にやりたいと、そういった方たちが今随分芽生えてきておまして、これは、従来のその今ここで申し上げたような連区としてのコミュニティとちょっと違う内容で、そちらの人たちが活動を始めています。これはとても大事なことでありまして、歓迎したいというふうに思っています。

その仕組みづくりを、この一宮でも何とかしてやろうと今やっておるわけですがけれども、この議論は、小委員会でも、特に杉本さんを中心にご発言が何回もございました。その中で、私が申し上げてきたのは、大事なことなのですと、大賛成ですと。ただし、行政が仕組みをつくって提供すべきものですかと。そうではないのではないのでしょうかと。住民の皆さんがそれぞれ自発的な意思に基づいて、自分の大事な時間を使い、あるいは自分のお金を提供し続けながらやるようなコミュニティの活動、そういうものを行政がどうやって受け入れるのか、行政にそういうものを受けとめる姿勢があるかどうか。

それは私も加えて、そういうふうには申し上げているわけでありまして、それは官主導ではコミュニティとしての活動に随分傷がつくのではなかろうかと。むしろ、私は住民に、市民や、町民の皆さんに、このボールを投げ返して、どうか頑張ってくださいと。ぜひそういう仕組みをつくって、地域で、例えば児童虐待は1件もこの地域コミュニティからは出さないとか、寝たきりのお年寄りが孤独で死んでいるのに、1週間も2週間も、場合によっては何カ月も気がつかないということは絶対にさせないとか、そういったこと。あるいは地域でのお祭りをみんなでどんどんやっていくのだとか、そういうことをやっていただけるような仕組みづくりを、むしろ皆さんがこの合併を機会にぜひ立ち上げていただきたい、そんなふうに期待をしています。

杉本 尚美合併協議会委員

先ほどのお話の中で、その自治内自治、その小さな単位における自治のあり方ということで、私自身も新市建設計画作成等小委員会の中で、非常に重要なことなのではないかということで、何度か発言させていただいています。

お話の中でもさせていただいたのですけれども、国の財源が、国から地方に向けてのその財源の配分というのは、今後なくなる傾向になる、減少していく傾向にあるという中で、住民が、その自分たちが住んでいる自治体に税を納め、その税を納めた分だけのサービスが返ってくるという、そういう状況を想定すると、今まで行政に関心のなかった方というのも、関心を持たざるを得ない状況が必ず生まれてくると私自身思っています。そういう意味でも、小さな単位での自治内自治の受け皿を用意していくことを、あるいは別の言い方をしますと、その種をまいておくことというのは、新市に移行する段階、今の段階で何らかの形で小さな種をまいておくことは重要なことなのではないかということ私自身思っています。

谷市長のおっしゃっていることも本当によくわかりますし、住民から声を上げて、つくり上げて、そして自治を行っていくというのが本来の形だと思いますが、せっかくその新しい市ができるという、誕生するという、こういう機会に、私たち、新市にどういうことを期待したいのか。そして、どんな市にしたいのかということについて積極的に議論をしているわけで、その中で、何らかの形で示していく、残していくことはできないのだろうかということ、私自身、考えています。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

時間になっておりますけれども、先ほどから手を挙げられている方もいらっしゃいますので、お一人だけ、恐縮です。こちら3首長さんいらっしゃいまして、ちょっと次のご予定があるようです。お一人だけ、ご指名をお願いします。

司会

どういたしましょうか、よろしいでしょうか。お二方いらっしゃいますが。

稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

今、お立ちの方。

司会

申し訳ございません。

質疑者C

一宮市長さんによろしく願いたいします。

木曽川町で、今保健センターを中心に、老人福祉、そして保健の担当の方が一所懸命、地域の皆さんに耳を向けて、本当に一所懸命頑張っていていただいております。その中で、私も介護予防のために、講師として健康のために活動をさせていただいておりますが、年々老人の方が元気になってくださることを見ていますと、本当に講師として喜んでおります。

この合併と同時に、このすばらしい健やかクラブの活動がなくなってしまうようなことがもしあれば、本当にお年寄りの方が、まだなくならないにしても、遠くの開業医へ足を向けなければいけないような状態になりますと、足踏みになって、閉じこもりのお年寄りが増え、また家庭不和になり、若い方の足も引っ張り、また、子供さんの不安な気持ちも多くなってくるとは思わないかなというふうに思います。

それで、本当にこれから年々お年寄りが増えてきますが、本当にお年寄りが元気で、若い方の足を引っ張ることなく、元気でいつまでもおっていただけるような、そういう町民の一人一人に身近なところで、また地域の近いところでそういうサービスが継続されていくことが、本当に私も携わっている活動者の一人としてお願いをしたいと思いますし、また、市長さんの今の考えをお聞きさせていただきたいと思いますので、よろしく願います。

谷 一夫合併協議会会長

どうもありがとうございます。今おっしゃったようなことは、まさにこの先ほど杉本さんがおっしゃった地域の誇れるものを残すということの中身だろうと思います。私は、行政が縦割りということをおっしゃられておまして、今おっしゃるように、そういった老人福祉の部分でも、保健と福祉が縦割りになってしまうようなことがあるわけですが、木曽川町さんの場合は、そこをうまく克服してやっていらっしゃるという話は聞いておりますし、私どもの方でも、昨年の機構改革で市民部と福祉部が一つになりまして、もう今では、保健と福祉、そして医療は一つの部で扱うと。

そういう体制をとってございまして、今おっしゃったようなことは、これからまた事務のすり合わせをしていかななくてはいけません、十分に残すことは可能ではないかなというふうに今のお話を聞けば思っておりますし、むしろ、それが非常にいいことであれば、全市的にそれは広げるべきことかもしれません。その辺はまたこれから考えていきたいというふうに思っておりますし、決してそういったことは、一緒になるからなくなってしまうようなことはお考えにならないでいただきたいと思います。

今ここでこんなことを申し上げたら申し訳ないかもしれませんが、やはり今どうしてもこの財政が、合併となるとどうしてもこれは必要でございますので、すべて木曽川町がやっていらっしゃるサービスは大変いいから、全部これを是非やらせてもらう、残してくれ、あるいは全市に広げてくれとおっしゃられても、全部をとというわけにはまいりませんが、例えば、今おっしゃったようなことは、恐らく十分に木曽川町として存続されることにつ

いては可能ではなからうかというふうに今聞いて思いました。ご心配ありがとうございます。

稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

ありがとうございました。

大変申し訳ありません。時間もまいりましたので、このあたりで質疑応答を終了させていただきたいと思います。

司会

申し訳ございません。ほかにもご質問などまだあるかと思いますが、ちょっとお時間の都合もございますので、これでよろしいでしょうか。

大変申し訳ありませんが、ちょっと予定の方を時間過ぎておりますので、これで質疑応答を終了とさせていただきます。

これももちまして、一宮市・尾西市・木曾川町合併シンポジウムを終わらせていただきます。本日は長時間にわたり誠にありがとうございました。（拍手）

どうぞ皆様、お帰りの際は忘れ物などございませんよう、また、交通事故などにお気をつけてお帰りくださいませ。本日は誠にありがとうございました。

午後 4 時 2 0 分 閉演